
聖痕のクェイサー × 真剣で私に恋しなさい！

マイシャッフルのクェイサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖痕のクエイサー×真剣で私に恋しなさい！

【Nコード】

N2097W

【作者名】

マイシャツフルのクエイサー

【あらすじ】

クエイサー。

それは、女性の聖乳<ソーマ>を吸う事によって、特定元素を自在に操る事が出来る特殊能力者。

私立・翠玲学園潜入捜査、メテオラとの対峙から1年が過ぎ、鉄のクエイサー・サーシャに新たな任務が下される。舞台は、関東の南に位置する政令指定都市 川神市。川神市に流出する正体不明の元素回路を根絶するため、サーシャ、織部まふゆ、カーチャ、桂木華は川神学園へ潜入する。

そして、大和たち 風間ファミリーとの出会い。交わるはずのない
2つの物語が今、交差する！

聖痕のクエイサーと真剣で私に恋しなさいのクロスオーバー小説で
す。戦闘あり、ネタあり、オリ設定あり、授乳（できるだけエロは
控えます）ありの学園伝奇ものです。文章能力・描写等は低めで素
人同然ですが、キャラの性格等、原作を忠実に書いていきたいと思
うので、よかつたら見ていってください。

プロローグ -クエイサー side-

アトス総本山本部。

天井から降り注ぐ、眩しく神々しい光が巨大な聖堂内を包んでいた。

聖堂の奥には大きな教壇。その教壇の前に立つ右目に眼帯を着けた男 ユーリ。野田はいる。

そしてユーリの前には銀髪の少年 致命者サーシャ。

隣にはサーシャのパートナー “剣の生神女” 織部まふゆ。

赤銅の人形遣い エカテリーナ。クラエと、パートナー “雷の携香女” 桂木華。

彼らはこのアトスの総本部に招集をかけられていた。

「今日お集まり頂いた理由は他でもありません」

ユーリの声が聖堂内に響く。

「任務だな」

サーシャの問いに、ユーリはええと頷いた。

「川神市に詳細不明のエレメンタル・サーキット元素回路が流出し、被害が出ているとの情報が入りました」

エレメンタル・サーキット
元素回路。

元素番号0の「賢者の石」を使って編み出され、身に着ければ様々な力を得ることが出来る代物である。

その元素回路が川神市内では撒かれ、所有した人間が悪事に利用し、暴行や窃盗が頻繁に行われているという。

「調査の結果、元素回路の流出先が川神学園周辺にある可能性が極めて高いと判断しました」

川神学園 川神市内を代表する大規模な学校で、特徴的な行事・授業が行われている有名校である。

アトスの調査部隊の報告によると、元素回路の流出が学園周辺に集中していることが判明したが、出所は一切不明。

川神院の人間や学園関係者にも協力を依頼しているが、危険な代物であるため、知っている人間は一部のみ。調査は難航していた。

「あなた方は川神学園に生徒として潜入し、元素回路の調査に当たってもらいます」

なるべく大事にならないよう速やかに処理をする…それがアトスの決定だった。

「致命者サーシャ、織部まふゆ。エカテリーナ、クラエ、桂木華。川神学園に潜入し、元素回路の流出先を搜索、回収及び破壊するのです」

サーシャ達の、新たな任務が始まる。

ブログ - クエイサー side - (後書き)

初投稿です。今後も頑張って更新していきたいと思うので、宜しくお願いします！

プロローグ ・ まじこい side ・

関東の南に位置する政令指定都市、川崎市。季節は夏。

江戸時代から栄えていて、武士の屋敷等、歴史的建造物が多い。

そんな歴史ある街の中に、川神学園はある。

その川神学園を繋ぐ、大きな橋が多馬大橋。橋の下には多馬川が流れ、喉かな風景が続いている。

また、個性豊かな生徒が多いことから、通称「変態の橋」と呼ばれていた。

その橋を渡り、川神学園へと向かう生徒たち一行 風間ファミリー。

ファミリーのリーダー風間翔一ことキャップ。参謀役・直江大和。

島津岳人、師岡卓也。川神一子、川神百代、椎名京に黛由紀江。そして、クリステイアーネ・フリードリヒ。

仲の良いグループで、何をするにも一緒。新しく参入したクリスもすっかり溶け込んでいた。

「ああ、突然空から美少女でも降ってこないだろうか」

と、唐突に空を仰ぎながら幻想を抱く百代。向かう所敵なし。百戦錬磨の武神。

「何言ってるんだよモモ先輩は。美少女なんて周りにいくらでもいるじゃねーか。俺にも分けてほしいくらいだぜ……」

恨めしそうに溜息をつく岳人。現在告白連敗中である。

「ダメだ、やらんぞ。あれは全部私のものだ。悔しかったら奪い取ってみろ。はっはっは」

勝ち誇ったように、高らかに笑う百代。当然それは自殺行為なので手は出せない。

「くっそ……ああ、突然可憐な美少女（年上限定）が告白してこねえかな」

「大丈夫。それは天と地が引っくり返ってもあり得ない」

岳人にとどめの一言を入れる京。岳人はしゅんと肩を落としたのだ。
った。

何気ない会話に花を咲かせる風間ファミリー一行。いつもの光景。
いつもの日常。

そして。

「……あれ？みんな、前見て」

師岡 あだ名はモロ。モロが指差した先に、奴らはいた。

風間ファミリーに立ちはだから、柄の悪い、黒の革ジャンとジーパンに身を包んだ輩が4人。

そう。百代に挑む挑戦者達だ。この橋では、百代に挑む者達が後を絶たない。

「川神百代。俺たちに出会った不幸を嘆くがいい」

不気味に笑う、スキンヘッドにサングラスをかけた男。その背後に、金髪に染めた不良が3人いた。

「何だお前。ハゲの兄弟か？道理で似てると思った」

「それ、似てる所は頭だけだからね」

すかさず突っ込みを入れるモロ。ちなみにハゲというのは2・Sの井上準のことである。

「呑気な顔をしているのも今のうちだけ。俺たちはそこいらの人間とは訳が違う！」

不良Bが気味の悪い笑みを浮かべる。

「俺たちはクエイサー。元素を操る力を持つ能力者だ。俺は元素番号113番、俺の元素はウンウントリウム！」

不良Aがダガーを手に構える。

「俺は元素番号114番。俺の元素はウンウンクアジウム！」

不良Bがメリケンサックをはめた拳を振るう。

「俺は元素番号115番、俺の元素はウンウンペンチウム！」

不良Cが鉦を振りかざす。

「「俺たち、化学のイケメン貴公子“ウンウン　マイスリー”！」
！」「」

不良A・B・Cがそれぞれポーズを取って、呼び名を叫んだ。

「そして俺はヘリウム三兄弟、5番目の弟！」

脇にいたスキンヘッドが、おまけのように自己紹介する。

.....。

風間ファミリー全員、沈黙していた。

「おおっ！何かかつけえな！」

ただ一人、キャップを除いて。キャップは目を輝かせながら感動していた。

「どうした。恐怖で何も言えなくなったか？それは当」

「いや知らん」

不良3人組＋スキンヘッドの渾身の自己紹介も虚しく、百代はあっさりと言いつ切ったのだった。

「な、何だと！？俺たちクエイサーを前にして驚きもしないとは…
貴様、何者！？」

「知らんものは知らん。そもそもなんだ“くえいさー”って。新しい芸人グループか何かか？おい大和、知ってるか？」

百代の側にいた大和に尋ねる。

「いや、全然。聞いたこともないね。みんなは知ってる？」

後ろにいるメンバーに聞いてみるも、全員首を横に振るだけだった。

「みんな知らないそうです。それと、もう少しセンスのいい芸人名にしたほうがいいですよ。ウンウンなんかはちょっとね……」

と、大和。その返答にウンウン　マイスリー一同の表情が歪む。

「何か一発屋芸人にいそうだよな。それに、三兄弟なのに5番目の弟って……」

「それにイケメンってほど美系でもねえよな。ちなみに、イケメンってのは俺様みたいな人間の事を言うんだぜ」

「ガクトに言われたらおしまいだね」

モロ・岳人・京の連携突っ込みが炸裂する。スキンヘッドの頭に血管が浮き上がった。

「貴様ら、さつきから聞いていればごちゃごちゃと！……まあいい、俺たちの力を見れば、そんな口は叩けなくなるだろうっからな！」

スキンヘッドがファイティングポーズを取った。

「ここをお前の墓場にしてやるぜ、川神百代！」

「貴様を倒した後は、まずはそのけしからんおっぱいを晒してもらおうー！」

「そして聖乳^{ソーマ}をたっぷりと吸わせてもらおうぜ！」

不良3人組＋スキンヘッドが一斉に飛びかかり、百代に向かって突進する。

「“そーま”？何だそりゃ……まあいいか、軽く遊んでやるっ」

彼らの挑戦を受ける百代。だが百代は構えない。ただ向かってくる敵を待つのみ。

「沈めえー……」

挑戦者達は勝利を確信していた。勝てる、と。だが彼らは知らない。百代の圧倒的な強さを。

そして次の瞬間。

。

戦いは、あっという間に終わっていた。

スキンヘッドと不良3人組は、ボロ雑巾のように転がっている。百代は傷一つ負っていない。

勝負は、百代の圧勝で終わった。

「ば…バカな…俺たちが、負けるはず…」

スキンヘッドが朦朧とする意識の中、今起きた現実を受け入れられずにいた。たった一人の小娘相手に、一瞬にして全滅するなど、信じられるはずがない。

「意外だ。私の攻撃を受けたヤツは大抵意識を失うんだが…お前、結構タフだな」

感心する百代だったが、突然ニヤツと笑みを浮かべた。スキンヘッ

ドの背筋が凍りつく。本能が逃げろと警告しているが、戦闘によるダメージで体が動かない。

「褒美だ。眺めのいい場所に連れて行ってやる」

百代がニヤニヤしながら手をボキボキと鳴らし、スキンヘッドの胸倉を掴んだ。

「ひっ……ま、待て悪かった。今日の所は見逃しておいてやる。だから……」

「ん、聞こえないなあ」

「だ、だから悪か」

「あ、そついや私のおっぱいがどうとかって言ってたよな」

「え、それは俺じゃ」

「問答無用！そーーら、飛んでいけ！」

命乞いも虚しく、百代はそのままスキンヘッドを空に向かって投げ飛ばした。スキンヘッドは断末魔と共に、空の彼方へと消えた。

「ほら、お前たちも置いていかれるぞ。そーーれ！」

続いて不良3人組も投げ飛ばした。3人とも星になった。

「こうして、もも先輩に挑んだ芸人たちは、空へ旅立ちましたとさ」

しめくくる京。しかも彼らは最後まで芸人扱いだった。

「このやり取りもすっかり見慣れてしまったな」

「そつですね……」

『いやあ、慣れっつのは「ワッいぜー」』

クリスと黛由紀江ことまゆっち、そしてまゆっちの掌にいる馬のストラップ・松風。

最初は驚いていたが、今となっては日常の光景の一つとなっていた。

百代に挑戦しては敗れ、空を飛ぶ者もいれば、川へ落ちる者もいる。正式な試合であれば川神院へ運ばれ手当てを受けるのだが、最近是非公式で挑む者たちが多かった。

「流石はお姉さま！あたしも頑張らなくちゃ！」

熱心にダンベルでトレーニングをしているのは一子ことワン子。百代を目標に日々鍛錬に明け暮れている。

「そうかそうか。可愛いやつだな、お前は。なでなでしてやるっ」

百代はワン子を抱き締め、頭を撫でる。ワン子は気持ちよさそうに甘えていた。

「それにしても、ここ最近変な人増えてない？」

この橋には変な人間、もとい格闘家等が多いのは元々だが、日に日に増えている気がする、とモロ。メンバー全員も薄々と感じていた。

「しかも、姉さんを倒そうとする輩ばかり。命知らずだね、可哀想に」

大和はやれやれと肩を落とす。

「おまけにどいつもこいつも弱過ぎて退屈凌ぎにもならないから困る。今日の連中も“くえいさー”だの“そーま”だの訳が分からん」

百代は自分と対等に戦える人間と出会えず、満たされないうでいた。

「こんな時は、弟を弄るに限るな」

咄嗟に大和を捕獲し、大和の頭を自分の胸に埋めさせる百代。

「ね、ねえさん苦しい……」

「ほぐら大和。私の“そーま”を吸え。なーんてな。はっはっは」

百代と大和はいつもこんな感じでじゃれ合っていた。一方的に弄られているのは大和なのだ。

「……おっ、そろそろ急がねえと遅刻するぜ？みんな」

キャップが腕時計を見ながらメンバー全員に伝える。

「珍しいね。いつもならそんなこと言わないのに」

いつもは時間を気にせず、常にフリーダムなキャップには珍しい発言だ、と大和。

「なんか今日は、すっげえ面白い事が起きそうな気がしてウズウズしてるんだよな！」

キャップはもう居ても立っても居られないくらい、テンションが高かった。

当然根拠はないが、こういつ時のキャップの勘は良く当たる。というより外れた試しがない。

本人曰く、風の知らせだとか何とか。

「こうしちゃいらねえぜ！早速教室までダッシュだ！ひゃっほー
ー！」

言って、キャップは風のように走り出した。こうなるとキャップは誰にも止められない。

「あ、待てキャップ！」

クリスが続いてキャップを追いかける。

「む、クリに先を越されるわ！クリ、どっちが先に着くか勝負！」

ワン子が勝負勝負と連呼しながら走りだす。

「なんだかよく分かんねえけど、俺たちも行くこうぜ！」

「あ、待ってよ岳人！」

「皆さん、待ってください！」

『オラもいくぜー！』

岳人、モロ、まゆっち、松風も後に続く。

「はっはっは。キャンプは相変わらずだなく、私も混ぜろ〜！」

百代もキャンプ達を追いかけていく。

「みんな子供みたいに……しょーもない」

京はキャンプ達には着いていかず、あくまでマイペースだった。

「私たちは大人だから、こうしてイチャイチャしながら愛を育む……
…大和、好き」

そしてあくまで大和一途だった。大和の腕に絡み、身体を密着させてセックスアピール。

「おっと、遅刻したらやばいから俺も行かないと」

大和は京から逃げるように走り去って行く。

「ち、逃げられた。照れなくてもいいのに〜、もう、大和ったら可愛い
可愛い」

京も大和の後を着いていく。どこまでも一途だった。

こうして、彼ら風間ファミリーのいつも通りの日常は、穏やかに始まりを告げた。

しかし、彼らはまだ知らない。これから起こる数多の出会いと、決して忘れることのできない、サーシャ達との物語を。

ブローグ - まじこい side - (後書き)

次回、サーシャたちが2-Fに転入します！そしてバトル発生・・・
には少し時間がかかりそうです。ボンボります、はい。

1話 川神学園、潜入

川神学園、応接室。

サーシャ、まふゆ、華はHRの時間が来るまで待機していた。

一方カーチャは別行動のため、まだ合流していない。

アトス本部でユーリから任務を受けた数日後、サーシャ達は川神市へ移動し、現在に至る。

任務遂行中の間は川神院へ滞在し、表向きは学園で通常の学園生活を送り、裏で元素回路の捜索にあたる。それが任務の内容だった。

「うちの制服もいいけど、ここの制服も結構可愛いわね」

白で統一されたデザインの川神学園の制服に、まふゆはすっかり気に入っていた。

「市を代表するってくらいだから凝ったもん想像してたけど、割とシンプルだよなー」

華の満更ではない様子。

「はしゃぐのは勝手だが、忘れるなよ。俺たちは遊びに来ているわけじゃない」

まふゆと華に忠告するサーシャ。サーシャはいつも通り私服姿でソファに座り、読書に耽っていた。

「そんな事分かってるわよ……それよりサーシャ。どう、似合っ？」

まふゆが制服の感想を求めてくる。

いつもとは違う、まふゆの制服姿。妙に意識してしまい、サーシャの顔が僅かに赤く染まった。

「……し、知るかそんな事」

照れ隠ししているのか、サーシャはまふゆから目を逸らし、ポソツと呟くのだった。可愛くないんだからと、思わず苦笑いするまふゆと華。

「しっかし、よかったよな〜サーシャ。ここが“女子高”じゃなくてさ」

華がソファに寄り掛かりながら、嫌味つたらしく、そして“女子高”を強調しつつサーシャに言った。読書をしていたサーシャの身体がビクッと震える。

私立翠玲学園 1年前、サーシャが女装して任務を遂行していた自分を思い出してしまい、とうとう顔を真っ赤にしながら華を睨み付けた。

「華、お前……嫌な事を思い出させるな！」

「まあまあそう怒るなよ。アレはアレで結構似合ってたんだぜ？」

華に太鼓判を押されて、サーシャは更に顔を真っ赤にさせるのだった。

ちなみに任務の前日。

『そう言えば、言い忘れていました。サーシャ君』

本部を立ち去る時、ユーリに呼び止められる。

『何だ？』

『潜入先の川神学園についてですが……』

『ああ』

『男女共学です』

『それがどうした？』

『翠玲学園の時と同様、女装しても構いませんよ？』

『……ふざけるな』

『私としては、是非ともそちらを希望したいのですが』

『するかっ！！……！！……！！……！！……！！』

こんなやり取りがあった。サーシャは全力で拒否した。ユーリ曰く「非常に残念です。」との事。

(サーシャが女装ねえ……)

まふゆは女子制服姿のサーシャを思い浮かべてみる。

銀色に輝く、サラサラとした長髪。碧色の瞳。川神学園の制服に身を包み、凜としていて、それでいて優雅で美しい。

『初めまして。私、聖ミハイロフ学園から転入してきました、アレクサンドル＝ヘルといいます。宜しく願いますね。皆さま』

まふゆ達が女性としての自信を失くしそうな程、恐ろしく似合っていた。

「……結構、アリかも」

ぼか〜んとした表情で、まふゆは思わず声を漏らす。

「だろ？ほら、織部もあ言ってる事だし、今からでも遅くねーから、女子制服に着替えてこいって。メイクは任せとけ！」

華はノリノリでサーシャに絡んでくる。

「誰がするか！考えただけでも身の毛がよだつー！」

サーシャは本気で嫌がっていた。翠玲学園の一件から、もう二度と女装はごめんだと心に決めている。

と、二人がそんなやり取りをしている内に、ようやく応接室に教師が一人やってきた。

2・Fの教師こと、小島梅子。

梅子も今回の一件を知っている数少ない人間の一人である。

サーシャ達はソファに座り、梅子と向き合った。

「待たせてすまないな、君たち。話は学長とユーリ殿から聞いてい

る。それと、学長なんだが…生憎と立て込んでいな。また後程挨拶に来られるそうだ」

話を進めながら、資料をサーシャ達に配る梅子。資料の内容はユリから説明を受けているので、大方サーシャ達は把握している。

「学園の校則・行事についてはその資料に全て記載されている。目を通しておいてくれ」

梅子は一通り話を終えると、間を置いて話題を切り換えた。任務についてだ。

「早速本題なんだが…エレメンタル・サーキット元素回路、だったか。残念ながら報告の通り進展はない」

申し訳なさそうに、梅子は話を切り出した。

元素回路は麻薬のように販売目的で出回っているわけではないようだった。そのため、実際に物自体を見たという目撃情報はなく、被害者、または加害者が気絶した状態で発見されるケースが殆どだった。

さらに被害者および加害者はその時の記憶を一切失っていて、手掛

かりが全く掴めずにいるのが現状だと、調査にあたった関係者は全員手を焼いているという。

「私たちだけでは解決できない状態にある。もはや君たちだけが頼りだ。私たちも出来る限り助力を吐尽くそう」

力を貸してほしいと、梅子はサーシャ達に頭を下げる。解決の糸口が見つからない今、皆縋る思いだった。

「無論だ。必ず見つけ出す」

「私たちも全力で解決致します」

「任せてください」

必ず解決する…そう受け答えるサーシャ、まふゆ、華。梅子は3人を見て安堵したように笑うが、すぐに表情を引き締めた。

「しかし任務とはいえ、この学園に転入した以上はしっかりと勉強に励んでもらうからな。特別扱いはしないと思え。もし怠けようものなら……」

ジャケットの懐から鞭を取り出し、強烈な鞭裁きを披露する梅子。

「教育的指導だ」

威圧的な態度で、梅子は宣告した。思わず、サーシャとまふゆの腰が退ける。

(む、鞭……あれで叩かれたら、はぁ…はぁ)

華は逆に興奮していた。気まずい空気になってしまったので、鞭をしまい、コホンと咳払いをする梅子。

「それで君たちのクラスなんだが……」

コーリ経由で、聖ミハイロフ学園からサーシャ達の成績データを受け取っていた。

梅子はそれぞれのクラスをサーシャ達に言い渡す。

「まずは、桂木華。君はFクラスだ。ミハイロフ学園での成績はあまり宜しくないようだな。ちなみにFクラスの担任は私だ。みつちり扱いてやるから覚悟しておけよ」

ニヤリと笑いながら、梅子は華に言った。

「は、はいい……！」

華は非常に悦んでいた。

「この変態が」

サーシャが侮蔑の意味を込めて呟く。

「次、アレクサンドル＝ニコラエビッチ＝ヘル。織部まふゆ」

次にサーシャ、まふゆのクラスが言い渡される。

「アレクサンドル。君は飛び級しただけあって、成績は申し分ないな。素晴らしい」

思わず梅子が賞賛する程、サーシャの成績が良かったらしい。

「当然だ。どこかの馬鹿とは違う」

サーシャは華に対して言うように吐き捨てた。

「う、うるせーよ」

と、華。否定はしない分、馬鹿である事は自覚しているらしい。

「織部、君の成績もアレクサンドルに劣らず優秀だな。君たちは二人ともSクラスに入る権利がある」

Sクラスは中でも特別なクラスであり、優秀な生徒、また名声ある家柄の生徒がいると梅子は話す。ただし編入は任意であり、優秀かつ志願した者だけしか入れないという特進クラスだった。

「もちろん希望するのは君たちの自由だ。どうする、志願してみるか？」

特進クラスを進める梅子だったが、サーシャは迷うことなく、

「いや、俺は華と同じクラスでいい」

華と同じFクラスを志願したのだった。

「特進クラスだとかえって目立つ。できるなら、問題児の多いクラスに紛れたほうが動きやすい」

サーシャはあくまで任務を優先した。Fクラスは問題の多いクラスだと、学園の生徒が話していた事を耳にしている。

Fクラスの担任の梅子にとっては、耳の痛い話なのだが。

「私もサーシャの意見に賛成です。折角のご厚意ですが……今回は辞退させていただきます」

まふゆも同意見だった。

梅子は少し考え込んだが、サーシャ達がFクラスに入る事で、生徒たちにとって良い刺激になるかもしれない。そう思った。

「ふむ……そうか。君たちがそう言うのなら、是非とも私のクラスに歓迎しよう。それに、君たちのような生徒を受け持つ私としても鼻が高い」

これで、サーシャ達のクラスは梅子が担当する2・Fに決定した。
後はHRの時間が来るのを待つばかりだった。

1話 川神学園、潜入（後書き）

次でようやく2-Fの生徒たちと接触します。しかし、我ながら長いです……。

2話 波乱の幕開け

その頃、2-F。

Fクラスの生徒達は、HRまでそれぞれ雑談しながら過ごしていた。

「でさ、チカリン。そいつがおの女と付き合ってた系で……」

「うんうん、それでそれで？」

チカリンこと小笠原千花と、羽黒黒子は恋愛絡みの話題で持ちきりだった。

「ねえ、スグル。新作どうだった？」

「地雷確定。あんなものはクソゲー以外の何物でもない。ストーリーも演出も××のパクリ。新作が聞いて呆れる」

オタクの大串スグルとモロはPCゲームの話で討論中。

「さっきの競争はあたしの勝ちだわ！負けを認めなさいよクリ！」

「いや、僅かに自分の方が早かったぞ。負けを認めるのはお前だろっ、犬！」

ワン子とクリスは登校途中での競争で、勝ち負けを言い争っていた。

皆それぞれ、他愛のない話に花を咲かせていた。変わらない、いつも通りのFクラスの日常である。

しばらくして、HRを知らせる予鈴のチャイムが鳴る。

「おい、もうすぐウメ先生が来るぞー！」

Fクラスの生徒の一人が全員に告げる。すると今まで雑談していた生徒達は自分の席に戻り、何事もなかったかのように静まり返った。

梅子は厳しい。もしお喋りをしようものなら、鞭による教育的指導が待っている。

廊下からカツカツと厳しい音が聞こえ、梅子が教室に入ってきた。

「起立！礼！」

委員長である甘粕真与の号令と共に、クラスの生徒達が元気よく挨拶をする。

「おはよう！着席して良し」

全員が着席すると、梅子は早速話を切り出した。

「朝のHRを始める」

いつものように、梅子のHRが始まった。

「突然だが、今日付けでこのクラスに転入する事になった生徒達がいる」

梅子の突然の朗報に、クラス全員がざわめき始めた。

「静粛に！」

梅子の鞭が床を叩き、ざわめきが一気に？き消える。梅子は続けた。

「これから諸君に紹介しよう。よし、入っていいぞ」

梅子が教室の扉に向かって声をかけた。クラス全員の視線が扉に集中する。

「っし、失礼します！」

扉がゆっくりと開く。最初に入ってきたのはまふゆと華。二人は緊張しながら、黒板に自分達の名前を書き、これからクラスメイトとなる生徒達に振り返った。

「あの…聖ミハイロフ学園から転校してきました、織部まふゆです。よ、よろしくお願いします！」

「お、同じく桂木華です。よろしくお願いします！」

まふゆと華が自己紹介を終えると、クラス中の生徒 特に男子が騒ぎ立て始めた。

「っおおっ、マジ可愛いね!?!」

岳人が鼻の下を伸ばしながら、まふゆたちを見て興奮している。

「こりゃ嬉しいサプライズだぜ！あ、やべえ、勃ってきた…」

福本育郎 通称ヨンパチは遠い目をしながら、はあ、はあと妄想に耽っていた。

「ふん、また女子が増えたか……」

不機嫌そうにまふゆ達を一瞥するスグル。反応は皆様々だったが、とりあえず歓迎はされていた。

「こら、静かしろ貴様らっ！」

また鞭を床に叩きつけ、ざわめきを鎮める梅子。このやり取りに馴染めるのだろうか…まふゆは少し不安になった。

「実はな、もう一人いる。織部と桂木と同じく、聖ミハイロフ学園からの転入生だ。アレクサンドル、入れ」

梅子がもう一度、教室の扉に向かって声を出す。

「……………」

サーシャは無言で教室に入ってきた。クラス全員がサーシャを見て目を丸くする。

黒板に自分の名前を書き、緊張していないのか、表情を変えずに淡々と自分の名前を告げた。

「アレクサンドルニコロエビッチヘルだ」

自己紹介を終えるサーシャ。変わって、梅子が代弁してサーシャの説明を始める。

「彼はロシアから飛び級で留学してきた実力のある生徒だ。勉強で分からない事があれば、彼に教えてもらおうといい」

サーシャがよほど珍しいのか、クラス全員がサーシャに釘付けだった。

「急な話だが、みんな仲良くしてやってくれ。三人の席は先程伝えた場所の通りだ。以上、朝のHRを終了する」

HRが終わり、梅子がサーシャ達が席に座つたのを確認すると、教室を出て行った。

それと同時に、

「お……男の子キターーーーーー!!!!!!」

千花を筆頭に、一部の女子（殆ど）が歓声を上げた。一斉にクラス中の生徒達がサーシャ達によつてたかる。

「ねえねえ、アレクサンドル君だっけ？あたしは千花。小笠原千花よ。チカリンって呼んでね」

「あたいは黒子。ってかアレクサンドル君、マジ美形。あ、ちよく抱かれてえ」

「まふゆちゃん、彼氏は！？彼氏はあるの!？」

「桂木さん、よかつたら川神市内を案内しようか!？」

Fクラスの生徒達に囲まれ、怒涛の質問攻めが始まり、戸惑うサーシャ達。

「こ、こら。3人とも困ってるじゃないですか！ここは順番に……」

真与が生徒達をまとめようと試みる。しかし誰もがサーシャ達に夢中で、その声は届かなかった。

その一方で、彼らを観察する大和とキャップ。

「な？だから言ったろ？面白い事が起きるってよ！」

キャップの勘は当たっていたが、今日まで転入生が来るという情報は一切なかった。大和はそれが気がかりになっていた。

(……まあ、いいか。こういう事もたまにはあるさ)

深く詮索しても仕方がないので、大和はあまり気にしない事にした。

「まふゆちゃんは……80・56・84。華ちゃんは……79・54・79って所だな。なるほどなるほど……」

ヨンパチは距離を置いてまふゆと華の体型を観察し、スリーサイズを一瞬にして見抜いた。彼は女性の事になると、力を発揮する。

(うわ、何か寒気が……)

まふゆと華は悪寒を感じ取っていた。

その後もクラスメイトの質問攻めは1時限目の授業が始まるまで続き、初日早々、大変な思いをしたサーシャ達なのだった。

1時限目の授業終了のチャイムが鳴り、サーシャはすぐに教室から出ようと席を立ち上がる。これ以上質問攻めに合わないためだ。

「あ、待ってよアレクサンドル君！もっとお話し聞かせてよ〜！」

千花や他の女子達を無視し、サーシャは教室を後にした。

「……………」

教室を出たサーシャは壁にもたれかかり、疲れを吐き出すかのよう
にふうと溜息を洩らす。

(……騒がしいクラスだ)

元々賑やかな雰囲気嫌いなサーシャだが、ミハイロフに転入して
からは徐々に慣れつつあった。

しかし、このクラスはそれ以上に賑やか過ぎる。任務が終わるまで
の間、このクラスの生徒と付き合うのだと思うと先が思いやられる
…と、サーシャは肩を落とす。

しばらく壁にもたれかかって休んでいると、生徒が数人、サーシャ
に近づいてきた。

「お前が例の転入生か？」

話しかけてきたのは、着物を着た女子生徒 不死川心。その隣には
葵冬馬、井上準、榊原小雪と他数名。

全員、2 - Sの生徒達である。次から次へと…サーシャはうんざり

した。

「何の用だ」

「2 - Fに転入してきた生徒がいると聞いたので、どんな方なのか気になりましたね…… ああ、私は葵冬馬。2 - S所属です」

冬馬が自己紹介を始める。1時限目の授業で、既に噂は流れていた。

「わゝ、銀髪だ。銀髪だゝ！」

まるで珍しい物でも見るかのように、小雪がサーシャをジロジロと観察し始めた。サーシャはあからさまに鬱陶しいという表情をする。

「こら、ユキ。困ってるからやめなさい……悪いな。こいつ、留学生があんまり珍しいもんだからはしゃいでんだよ」

準は詫びを入れながら、うーうー言いながら駄々を捏ねる小雪を連れ戻した。

「それにしてもお前、変わった奴じゃのう。飛び級で留学してきたと聞いたが、何故Fクラスなのじゃ？」

心の質問に対してサーシャは、

「俺がどこに行こうが俺の勝手だ。お前には関係ない」

心には目もくれず、淡々と答えた。そんなサーシャの態度が気に食わなかったのか、心は食ってかかる。

「生意気な奴じゃ。高貴な此方がわざわざ足を運んでやったというのに、随分と偉そうな態度じゃのう」

「お前を呼んだ覚えはない」

「ぐっ……お前、此方が誰だか分かっておるのか？」

「知ったことか。お前が誰だろうと興味はない」

「い、イラつくのじゃ〜！」

サーシャと心が言い争い（心が一方的に振った上、サーシャは全く

相手にしていない）をしていると、戻ってこないサーシャが気になったまふゆと華が教室から出てくる。

「サーシャ、どうかしたの？」

「別にどうもしない」

と、サーシャ。まふゆと華は周囲の状況を確認する。どう見ても、何も無いわけがなかった。

「なんじゃ、お前たちも転入生か。ふん、見るからに野蛮な顔立ちをしているのう」

サーシャでは相手にされないと分かった、今度はまふゆと華に因縁を付け始めた。華は舌打ちをすると、心を睨み付ける。

「何だお前、やんのかよ？」

「おお。怖い怖い。これだから2-Fは野蛮な山猿が多くて困るのじゃ」

扇子を広げ、口元を隠しながら嘲笑う心。冬馬と準、小雪以外のS

クラスの生徒達も小馬鹿にするように笑う。

(うわぁ、感じ悪……)

まふゆは嫌悪感を覚えた。するとまふゆ達に続いて、Fクラスの生徒達もぞろぞろと見物しにやってくる。

「関わらない方がいいよ、まふゆっち。あいつは2-Sの不死川心学園中の嫌われ者よ」

心は名家に生まれたSクラスの生徒の一人。名家に生まれたが故、偏った選民思想を持ち、周囲の人間を庶民として見下す嫌な奴だと千花が話す。

もちろん心だけではない。2-Sの生徒達は皆2-Fを見下している、Fクラスの殆どがよく思っていないかった。どうやら2-Sと2-Fは対立関係にあるらしい。

まふゆは、2-Sに志願しなくてよかったとホッと胸を撫で下ろした。

「2-Fの山猿どもがゾロゾロと……あゝ、嫌じゃ嫌じゃ。馬鹿がうつるわ」

ここぞとばかりに心は嫌味を放ち、2-Fから反感を買っている。

「言いたい事はそれだけか？馬鹿がうつるならさっさと失せろ」

黙っていたサーシャが顔を向けず、視線だけを心に向けて言い放った。

「ふん、身の程をわきまえよ。此方は不死川家の息女。やんごとなき身分なのじゃ。たかが飛び級して留学したくらいで、いい気になるでないわ」

2-Fの生徒に散々嫌味をぶつけて機嫌の良くなった心は、余裕の笑みすら浮かべ、サーシャを見下した。

そんな心の姿を見てまふゆと華は、

（なんか、昔の美由梨を思い出すわ……）

（なんか、昔の美由梨を思い出すぜ……）

同じ学園のクラスメイト 辻堂美由梨の事を思い出していた。今でもあの高笑いが聞こえているような気がする。

しかし、サーシャは心の言葉に動じることなく、

「見苦しい。他人の威を借るしか能がないのか」

かつて、辻堂美由梨に放った言葉を口にした。

「な……なんじゃと!？」

思わず動揺を隠せない心。今の今まで、そんな事を言われたのは初めてだった。

「自分では靴一つ磨けない無能者が、偉そうな口を叩くな」

「……い、言うておくがの、2・Sに入ったのは、此方の実力じゃ!」

今のクラスに在籍しているのは家の銘柄だけではない、と心は言い張る。以外に努力家だった。

「お前のクラスには成績一つで威張るような連中しかいないのか。特進クラスが聞いて呆れる」

「な、なななななな………」

心はとうとう言葉を失い、そのまま黙ってしまった。プライドを傷つけられ、シヨックを隠せないようだった。それも、相手が2・Fの生徒ならなおさらだ。これ以上の屈辱はない。

2・Fの生徒達から「いいぞー、アレクサンドル!」「もっと言うてやれ!」と、エールが送られた。

これ以上言い返してこないと分かると、サーシャは自分の教室へと戻っていく。

「……とじじや」

ふと、心が小さく咳いた。サーシャの足が止まる。

「何?」

「……決闘じゃ！此方はお前に決闘を申し込む！！！」

心は扇子をサーシャに突き付け、高らかに宣言した。

決闘 学生の間でいざこざがあると、学生同士で戦って決着をつけるといふ、生徒の自主性・競争意識を尊重した川神学園独特のシステムである。

「ちょ、ちょっとサーシャ。まさか受けるの？もし受けたりしたら……」

まふゆが耳打ちする。当然、決闘を受ければさらに目立つ事になるだろう。ただでさえ留学生という理由で有名人扱いなのに、これ以上目立てば任務に差し支える可能性がある。

「くだらん。お前の相手をしている暇はない」

サーシャは申し出を拒否した。面倒を起こせば任務に影響が出る……当然の判断だった。

「なんじゃ、怖気づいたか？あれだけ威勢のいい事を言っておきながら、所詮は口だけじゃったか。ほっほっほ、とんだ腰抜けじゃのう」

心はサーシャを罵り、嘲笑う。他のSクラスの生徒達からも笑い声が聞こえる。

ここまで馬鹿にされては黙ってはられない。流石のサーシャも頭に血が上り、心に振り返った。

『
事があるか？』

？（お前は、震えた

サーシャが感嘆してロシア語を口走り、心に敵意の眼差しを向ける。

「その決闘、受けて立つ！」

宣戦布告し、心との決闘を受理した。

「決まりじやな。場所は校庭、時間は昼休みじや。逃げ出すでないぞ」

時間と場所を指定し、心とSクラス一行はサーシャ達の前から去っていき、自分達の教室へと戻っていった。

「おい、聞いたか？アレクサンドルと不死川が決闘だってよ！」

「マジかよ、こりゃ見物だぜ！」

「どっちが勝つんだろうね！」

「あたしはアレクサンドル君に勝ってほしいわ！」

決闘が決まり、2・Fの生徒達が盛り上がり始めた。これで、サーシャ達のことが一気に学園中に知れ渡る事になるだろう。

「お、おいサーシャ。いいのかよ!？」

心配そうに尋ねる華。しかし受けてしまった以上、もう後には退けない。

「クエイサーの力を使わなければ問題ない」

「そついつ問題かよ……」

「目立たなければいいんだろう」

言って、サーシャは教室へ戻っていく。

「あの馬鹿……何考えてんのよ、もう」

予想だにしない事態が起きてしまったと、まふゆは肩を落とした。
この決闘で任務に影響が出ない事を、ただ祈るしかない。

結局、勢い余って決闘をすることになったサーシャ。こんな調子で、
無事に任務を終える事ができるのだろうか。

まふゆと華の不安は、さらに高まるばかりだった。

不死川心との決闘まで、後数時間。

2話 波乱の幕開け（後書き）

次はいよいよサーシャVS心の決闘が始まります！そしてカーチャ様も登場！

ちなみにサーシャのロシア語の翻訳は多分間違ってます……ロシア語の電子辞書でも買おうかな……。

サブエピソード1「クラスの雑談1：2 - Fの番長」

クラスの雑談1：2 - Fの番長

2時限目終了後の休み時間。

(ん、風を感じる……)

風が吹く予兆を感じ取ったヨンパチはカメラを身構えた。

ターゲットはもちろん千花。千花はまふゆとすぐに打ち解けていた。今はまふゆと話に夢中になっていて、こちらには気づかない。

(まふゆちゃんまでセットなんて……今日の俺はツイてるぜ！ぐへへ、こいつはいいアングルが取れそうだ)

涎を垂らしながら、まふゆと千花のスカートの捲れる瞬間を、今か今かと待ち続けている。

ズーム機能を使い、まふゆと千花の後ろ姿を捉え、スタンバイOK。退路確保。

(3・2・1……)

「きゃっ」

「わっ」

風が吹き、まふゆと千花のスカートが捲れ上がる。今こそシャッターチャンス！

「よっしやいくぜ！ファイ」

「何やってんだ、お前」

カメラのシャッターを切る前に、通りすがった華がカメラを取り上げた。

「アーーーーッ！！！！俺の今日のオカズがーーーー！！」

シャッターチャンスを逃し、悲痛な叫びを上げるヨンパチ。

「あ、わりいわりい。邪魔したか？」

どうやら華は悪気があってやったわけではなく、ただ純粹に興味本位でカメラを取っただけだった。

パンチラを撮ろうとした事は悟られてはいないと、ヨンパチはホッと息を漏らす。

「で、何やってたんだよ？」

「そりゃあ……あれだよ、俺は女性の美を追求してたんだ！」

しまった……とうっかり核心に迫るような発言をしてしまい、思わずヨンパチは口元を押さえた。

「は……？女性の美？追求？」

華はカメラで写そうとした場所を確認する。

そこには、スカートを押さえているまふゆと千花の姿があった。

「って、盗撮じゃねえかよ」

まふゆと千花のパンチラを盗撮しようとしたのだと、華は一目でわかった。

「いや、違うね！俺は盗撮なんてこそこそするような真似は絶対にしねえ！……ああ、でもたまにするかも」

「堂々と撮りやいってもんじゃねえだろ……」

開き直るヨンパチの態度に、華はもう呆れてものも言えなかった。

「華、どうかしたの？」

ヨンパチと話している内に、まふゆと千花がやってきた。華は持っていたヨンパチのカメラを二人に見せて、

「こいつ、織部とチカリンのパンチラを盗撮しようとしてたんだよ」

盗撮していた事を暴露した。ヨンパチはバツの悪そうな表情を浮かべている。

それを聞いたまふゆと千花は顔を真っ赤にし、ヨンパチを睨み付けた。

「また盗撮！？ホント凝りないよね、このエロザル！！」

「ちょっと福本君、どういつつもりなの！？」

まふゆと千花に責め立てられ、逃げ場をなくすヨンパチ。華はそれを面白がって見ていた。

「まあ、その辺にしとけよ。ほら、カメラ返すぜ」

言って、華はカメラをヨンパチに投げ返した。

「盗撮は好きにしてもいいけどよ、あたしの目の黒い内は絶対撮れねえと思ったほうがいいぜ？」

くっくっくと笑い、華は警告する。華がいる以上、女子の撮影は困難になるだろう。

「さすが華。頼りになるっ」

千花もすっかり華と仲が良くなっていた。

「く、くそお……見てるよ、お前の目を掻い潜って、絶対撮りまくってやるからな！」

しかし、ヨンパチは懲りることなく宣戦布告をするのだった。華はやれるもんならやってみると鼻で笑う。

こうして2・Fに、番長的な存在が誕生した。

サブエピソード1「クラスの雑談1：2-Fの番長」(後書き)

2話のサブエピソードになります。本編では描き切れなかったお話を、ちよくちよくうpしたいと思います。

サブエピソード2「クラスの雑談2：まふゆの実力」

クラスの雑談2：まふゆの実力

3時限目の休み時間の事。

まふゆはすぐクラスに馴染み、生徒達と打ち解けていた。

教科書を机の中に入れておくと、クリスに声をかけられる。

「聞きたいんだが、まふゆは剣道をやっているのか？」

クリスはまふゆの荷物にあった竹刀袋が、ずっと気になっていたようだ。まふゆは答える。

「うん。昔剣道部に入ってたんだけど、色々あって今は辞めちゃったの。でも稽古はちゃんと自分で続けている」

「そうだったのか。もし差し支えなければ、自分と手合わせを願いたい」

是非まふゆと一戦交えてみたい、とクリス。

「それって……まさか、決闘？」

「いや、単なる腕試しだ。自分は、まふゆの強さが知りたい」

決闘ではなく、純粋な勝負の申し出だった。サーシャに続いて決闘を起こせば、もう任務どころではなくなる。

それなら……と、まふゆは承諾した。

「いいけど、私あんまり強くないよ？」

「そうか？自分は、まふゆにただならぬ何かを感じるんだが」

クリスはまふゆに興味を抱いていた。

確かにまふゆは剣の生神女^{マシア}である事や、危険な任務に関わっている事。少なくとも普通の人間とは違う。

任務とはいえ、やはり隠し事をするのは気が退ける。

「なにになに？何の話？」

ワン子が話の輪に入ってくる。

「今度、まふゆと手合わせをすることになった」

「え、そうなの！？それならあたしも勝負してほしいわ！」

目を輝かせながらまふゆに懇願するワン子。先程の心といい、この学園は好戦的な生徒達が多いなとまふゆは思った。

「何か、二人とも強そうだよね」

思わず感想を漏らすまふゆ。

「まあね。ま、クリはあたしの次ってところかしら」

強いと言われ、すっかり機嫌を良くしたワン子はえっへんと胸を張る。

「む、それは聞き捨てならないな。どちらかといつと二番目はお前
だろう、犬」

「違うわよ、二番目はあんたでしょ!？」

「いいや、お前だ!」

互いに火花を散らすワン子とクリス。

「ま、まあまあ二人とも……」

まふゆが二人を宥めようと声をかける。しかし二人の耳には届かない。

「クリよ!」

「お前だ!」

「ちょ、ちょっと……」

暴走する二人を前に、どうしていいかあたふたするまふゆ。

「何よ、じゃあ勝負する!?!」

「望むところだ!」

「だ、だから……」

このままだと決闘になりかねない。まふゆは言う事を聞かない二人にとうとう痺れを切らし、

「だから……やめなさいって言うてるでしょうがぁ!!!」

竹刀袋から竹刀を取り出し、聞く耳持たないワン子とクリスの頭に面を食らわせた。

「あつわっ!?!」

「ぐっ!?!」

まふゆの一撃をもらい、ワン子とクリスはようやく落ち着きを取り戻した。

「……………」

「……………」

キョトンとした表情でまふゆを見るワン子とクリス。クラス中の視線がまふゆに集まった。

やばっ……と、まふゆは我に返る。

「いっしょ、ごめん！っい……………」

サーシャと接する時の感覚で、つい手が出てしまったとまふゆは謝罪した。

「……………見切れなかった」

「自分もだ」

しかし、二人とも怒っている様子はなかった。むしろ逆に感心しているといった感じだ。

「驚いたわ、まふゆも結構やるじゃない！」

早く戦ってみたいわ、とワン子は闘争心を燃やす。

「只者ではないと思っていたが……自分はますます興味が湧いたぞ、まふゆ！」

手合わせをするのが楽しみだ、とクリスは笑う。

何はともあれ、喧嘩に発展しなくてよかったとまふゆは安堵した。

「口より先に手が出るのは相変わらずだな」

一部始終を見ていたサーシャに痛いコメントを貰うまふゆ。

「う、うっさいわねこのツンドラ坊主！」

図星を突かれ、まふゆは顔を赤くしながらサーシャに食ってかかる。

本当に仲がいいなあ、とFクラスの生徒達はサーシャとまふゆを暖かく見守るのだった。

サブエピソード2「クラスの雑談2：まふゆの実力」（後書き）

まだ続きます。気が付いたら、20ポイントも頂いていました。評価して下さった方、ありがとうございます。

サブエピソード3「クラスの雑談3：ファミリートーク（男性陣編）」

クラスの雑談3：ファミリートーク（男性陣編）

同じく、3時限目の休み時間。

キャップ、大和、岳人、モロの4人は、サーシャと心の決闘の話で持ちきりだった。

決闘まで後数時間を切っている。当人のサーシャはというと、

「……………」

席に座り、静かに読書をしていた。

「アレクサンドル君、随分余裕だね」

モロはサーシャを見て思う。余程自信があるのか、それとも読書で緊張を紛らわしているのか。

どちらかというところ、前者に見えた。

「なあ、大和はどう思うよ？」

決闘でどちらが勝つか。キャップが大和に意見を求めてくる。

「うーん……今の時点では何とも言えないなあ」

突然転入してきた留学生、アレクサンドル「ニコラエビッチ」ヘル。

大和は少なからず、サーシャに興味を持っていた。

彼の事は未だ未知数。今の段階では結論は出せないが、今まで男子と女子の決闘では、男子の殆どが負けているというのが現状だった。

従って、統計学的に言えば勝利するのは心という事になる。

それに心は意外にも全国区の実力を持つ程の柔道。主に関節技の使い手であり、並大抵の人間ではまず勝てないだろう。

決闘の形式は喧嘩だけでなく、スポーツ、論争等の様々なジャンル

を選ぶ事が可能だ。

にも関わらず、サーシャは直接対決を選んだ。という事は、それなりに戦闘経験を積んでいると推測ができる。

「ま。考えても仕方ねえし、決闘の時間になるまで待とうぜ」

と、岳人。

しかしサーシャは心の戦闘スキルを知らないはずだ。一応知らせておいた方がいいだろうと、大和は席から立ち上がった。

「俺、ちょっとアレクサンドル君と話してくるわ」

言って、大和はサーシャの席へと近づいた。

「決闘まで後少しだね。緊張とかしてない？」

「……別に緊張などしていない」

サーシャは大和に顔を向けず、読書をしたまま答える。大和はその

まま続けた。

「アレクサンドル君の対戦相手なんだけど、あいつ 不死川心は柔道の使い手で、全国に通用する程の実力者だよ」

心について、知っている限りの情報を提供する大和。

ただ教える為ではない。これはサーシャとのコミュニケーションを取るいい切っ掛けになる。

サーシャという人物を、より良く知る為に。

するとサーシャは読書をやめ、読んでいた本を閉じて立ち上がる。余計なお世話だっただろうか…しかし、サーシャから返ってきたのは意外な言葉だった。

「（感謝する）」

ロシア語でいう、「感謝」の意味であると大和は理解する。第一印象は無愛想だが、意外に話の分かる奴かもしれないと大和は思った。

「だが、相手が誰だろうと俺には関係ない。立ちはだかる敵は

全て倒すだけだ」

それだけ大和に言って、サーシャはまふゆのいる席へと向かっていく。

「口より先に出るのは相変わらずだな」

「う、うっさいわねこのシンドラ坊主！」

サーシャにはまだ謎が多い。だからこそ、大和の好奇心がそそられる。

(アレクサンドル、か……)

面白い奴がやってきた……と、大和はサーシャという人物にさらなる興味を抱くのだった。

サブエピソード3「クラスの雑談3：ファミリートーク」(男性陣編) (後書き)

サーシャ×大和……これは一筆書けそうだ！

なんてことにはなりませんのであしからず(笑)

サブエピソード4「女王（エンプレス）の来校」

エンプレス
女王の来校

サーシャ達が2-Fに転入した同時刻、カーチャも学園に到着し、転入先のクラスは1-Cに決定した。

サーシャと同様、飛び級で学園に転入という手筈になっている。

「初めまして。エカテリーナIIクラスといいます。「カーチャ」って、呼んで下さい」

カーチャはスカートを広げ、とびきりの笑顔でクラス全員に一礼する。

まるで妖精のようなその姿は、1-Cの男子生徒全員目を釘付けにした。

女子生徒達もカーチャのあまりの可愛らしさに、思わず抱き締めたという生徒もいれば、いけない妄想に走ろうとする生徒もいる。

転入して早々、カーチャは1-Cのアイドルの座を獲得した。

「凄いですね……あんなに小さいのに、飛び級で留学だなんて」

感心し、カーチャに尊敬の念を抱くまゆっち。

『何言つてんだよー。まゆっちだって成績優秀で、色々頑張ってるじゃんかー』

携帯ストラップの松風が、まゆっちに励ましのエールを送る。と言つても実際に喋っているのはまゆっちなのだが。

そんな中、カーチャは松風と喋っているまゆっち（独り言）に視線を注いでいた。

（……ふーん）

ニヤリとカーチャの口元が吊り上がる。この瞬間、まゆっちが奴隷候補にあがった。

そして昼休みの時間。

昼食を食べ終えたまゆっちは、友人であるクラスメイト 大和田伊予と一緒にいた。

「とうわけでイヨちゃん。私、カーチャさんに声をかけてみたいと思います」

カーチャと友達になるきっかけを作るため、意気込むまゆっち。ただ声すらかけていないのに、まゆっちは緊張して顔を強張らせていた。

ちなみにまゆっちの友達100人計画は、まだ続いている。

「落ち着いてまゆっち。ほら、深呼吸深呼吸」

『そつだぜー、まゆっち。ここで挫けたら前に進めねえー』

私も一緒に声をかけるから、と伊予や松風も応援してくれていた。

「すー、はー、すー、はー……で、では、参ります！」

深呼吸して息を整え、まゆつちはカーチャのいる席へと足を運ぶ。

「こんにちは、お姉さま方」

まゆつちの視線の先には、無垢な笑顔を浮かべたカーチャの姿があった。

突然のカーチャの訪問に、まゆつちの心臓が飛び跳ね、バクン、バクンと音を立てる。

「あ、あああ、えええっと、あのその……こここここんにちは
！！」

先に声をかけられて、緊張が極限までに達したまゆつち。辛うじて挨拶は返せたが、顔は強張ったままだった。

そんなまゆつちを見兼ねて、伊予が助け船を出す。

「こんにちは、カーチャちゃん。私は大和田伊予。こっちは黛由紀江。で、この子が松風、よろしくね」

『おう、よろしくなー』

「はい、よろしくお願ひします。伊予お姉さま、由紀江お姉さま、
松風」

カーチャは自己紹介の時のように、礼儀正しく一礼する。

(ほら、まゆっち)

伊予が肘でまゆっちの脇を突く。本当なら伊予が伝えれば済む話だが、それではまゆっちの為にならない。

『いけー、チャンスだまゆっちー。やるなら今しかねえ。大人の階段を登るんだー!』

松風の後押しをされる。まゆっちは意を決して大きく息を吸い込み、カーチャに伝えた。

「あ……あああの、わ、わわわたしとお友達に」

「おい、聞いてくれ！転入してきた2-Fの留学生と、2-Sの不

死川先輩が決闘だつてよ！」

同じクラスの男子生徒が声を張り上げる。クラス全員が一斉に教室を飛び出し、決闘の場である校庭へ向かう。おかげで、まゆっちは言いそびれてしまった。

2-Fの留学生……それはサーシャの事だとカーチャはすぐに分かった。

（決闘……？はっ。ジェレーザ鉄の奴、目立った行動はしないって言ったくせに、ほんとお子ちゃまね。ま、いいわ）

決闘のシステムはカーチャも知っている。いい退屈凌ぎになりそうだと、心の中で笑った。

「カーチャ様、校庭へお連れ致します。行きましょう」

カーチャの前に現れたのは、男子生徒と女子生徒が数名。腕を後ろに組み、頭に『カーチャ様 LOVE』と書かれた鉢巻きを巻いている。

カーチャのファンが増え、ついには親衛隊まで結成されていた。カーチャにとっては迷惑な話だが、今後役に立ちそうなので好きにや

らせておく事になっている。

「ごめんなさい。カーチャ、呼ばれてるみたいだから行かなくちゃ」

カーチャはもう一度だけまゆっち達に一礼し、

『 (またね) 』

ロシア語で言う、「またね」と言って、親衛隊と一緒に教室を出て行った。

「うっ……言いそびれてしまいました」

せっかく勇気を出したのに……まゆっちはガツクリと肩を落とす。

『うわー……今のはさすがに切ねーよ、まゆっち』

同情する松風。

「だ、大丈夫だよまゆっち。まだチャンスはあるから」

元気を出して、とまゆっちの肩を叩く伊予。しかし、まゆっちのシヨックは大きかった。

「ほら、私達も決闘を見に行こうよ。何か面白そうだよ！」

まゆっちの手を引っ張る伊予。落ち込んでいても仕方ない…まゆっちは気持ちを切り替える。

（そうですよ……ここで諦めてはダメ。よし、頑張れ私！）

決闘が終わったら、もう一度カーチャに声をかけよう。その決意を胸に、まゆっちは伊予と共に教室を出て行くのだった。

サブエピソード4「女王（エンプレス）の来校」（後書き）

ついにカーチャ様のご登場です。小説の更新についてですが、仕事が始まってなかなか更新できないかもしれないかもしれませんが、完結まで書きたいと思っていますので、見てくださっている方、応援よろしくお願いします！

3話 対決（前書き）

前回のお話でカーチャ様登場！と書きましたが、話が長くなりましたのでパートを分けて書きました。カーチャ様の登場は次になります。申し訳ないです……………

3話 対決

ついに、サーシャと心の決闘の時間がやってきた。

学園の校庭には大勢の生徒達や教師が集まり、決闘の始まりを待っている。

その中には、ここぞとばかりに弁当を売って稼ごうとする者や賭けをする者、カメラで撮影をする者等、様々な人達でこった返している。

校庭はもはやイベント会場と化していた。

その大勢のギャラリーの中心に、対戦者　　サーシャと心がいる。

「逃げなかった事だけは褒めてやるのじゃ、アレクサンドル」

まるで自分の勝利を確信しているように、心は余裕の笑みを見せていた。一方のサーシャは無言のまま、心を睨み付けている。

もうすぐ、二人の試合が始まるうとしていた。そんなサーシャの行く末を、心配そうに見守るまふゆと華。

「……とうとう始まっちゃったわね」

まふゆはサーシャの姿を眺めながら呟いた。

「そっぴゃ同じクラスの直江から聞いたんだけどよ。あの不死川心つて奴、全国レベルの柔道の使い手なんだってよ。クエイサーの力を使わないっていつても、結構ヤバいんじゃないのか？」

華は念の為、クラスの人間から情報収集をしていた。

不死川心　　決闘を申し込むだけあって、戦闘スキルは高い。

「い、一応、私の聖乳ソーマを吸ってあるし……っていつか、勝たなかったら許さないんだから」

顔を真っ赤にしながら、胸を隠す仕草をするまふゆ。

決闘前、まふゆとサーシャの間でこんなやり取りをしていた。

誰もいない、2・Fの教室。

決闘まで後数分。サーシャはまふゆを呼び出した。

『まふゆ。念の為だ、お前の聖乳ソーマを吸わせてくれ』

『え……！』
『……！？』

『お前が必要だ』

『う……わ、分かったわよ。その代わりに、やるからには絶対に勝ちなさいよね』

そう言ってまふゆはワイシャツとベストをたくし上げ、ブラジャーを外す。

『（当然だ）』

そしてサーシャはまふゆの胸にゆっくりと口を近づけて……。

『んっ……！？あっ、うっ……！！』

。

サーシャの聖乳は既に補給済みだった。恥ずかしそうに話すまふゆを見て、華は思わず苦笑いした。

しばらくして、周囲にいた生徒達がざわめき始める。いよいよ決闘開始だ。

現れたのは威厳のある老人……川神学園学長の川神鉄心である。鉄心はサーシャと心の中に歩み寄った。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！」

鉄心の声が校庭中に響き渡り、校庭中から一気に歓声上がる。

「と、その前にじゃ……アレクサンドリヤ……ニコベチヨ、言いにく
い名前じゃのっ」

サーシャの名前が言いにくいのか、髭を弄りながら苦笑いする鉄心。

「サーシャで構わん」

先に進まないの、サーシャは鉄心にそう促した。

「ふむ、そうか。ではサーシャよ、先程は挨拶が出来なくてすまんかったの。ワシは川神学園の学長を務める、川神鉄心じゃ」

鉄心は自己紹介を簡潔に終わらせると、“また後程ゆっくりと話そう”と意味深な言葉を口にする。

鉄心は、サーシャ達の滞在先である川神院のトップであり、今回の任務の一件を知る重要中心人物だった。

「では、二人とも前へ出て、名乗りを上げるが良い！」

鉄心の掛け声と共に、サーシャと心が一步前が出る。

「2・F、アレクサンドル＝ニコラエビッチ＝ヘル」

「2・S組、不死川心！」

心も名乗りを上げ、サーシャと対峙する。

「ワシが立ち会いのもと、決闘を許可する」

基本的な判定は、勝負がつくまでは何があっても止めない。ただし、勝負がついたにも関わらず攻撃を行えば、ワシが介入して決闘を止めると鉄心が付け加えた。

「問題ない」

「心得たのじゃ」

サーシャと心は同意し、戦闘態勢に入る。

(……さて。アトスの秘蔵“致命者サーシャ”とやらがどれほどのものか、見せてもらおうぞい)

鉄心はサーシャの戦いぶりを期待していた。派遣されたクエイサーがどれ程のものか、それを知る良い機会である。

「いざ尋常に、はじめいっ……！」

鉄心の合図と同時に、サーシャVS心の決闘の火蓋が切って落とされた。

「いくぞっ……！」

「すぐ楽にしてやるのじゃ……！」

互いに衝突し、体術のぶつかり合いが始まる。

近接戦闘は、心の必殺の間合い。心はサーシャの手を絡め取るうと手を伸ばした。が、サーシャはそれを払い落とし、蹴りで反撃する。

「ふん。当たらぬわ……！」

ひらりと身を躲す心。二人とも隙を一切見せず、激しい攻防を続けている。

「すっげえ……アレクサンドルの奴、あんな強かったのかよ……！」

観戦していた岳人が思わず声を漏らす。

岳人だけではない……観戦している人間の殆どが、ハイレベルな戦いを前に度肝を抜かれていた。

（一筋縄ではいかないか）

サーシャは反撃と防御を続けながら、心の力量を測っていた。

近接戦闘においては、サーシャも退けを取らない。だがそれ故、心に対して迂闊な真似はできなかった。関節技を一度でも食らえば、こちらが不利になる。

（だが　　それなら！！！！）

サーシャは動きを変え、防御を捨てて攻撃に徹した。殴り、蹴りを雨のように浴びせ、怒涛の攻撃で心を攻め立てる。

「うっとおしいのじゃ！そらっ！！！」

「

！！！」

心はサーシャの腕を掴み、勢いよく背負い投げた。視界が反転し、空へと高く投げ飛ばされる。

しかしサーシャは空中で体制を整え、受け身を取ることなく着地に成功した。

「　　畳みかけてやるのじゃ！」

心の反撃は止まない。急接近して、サーシャに再び攻撃を仕掛ける。

「　　舐めるな!!！」

サーシャは地面を強く蹴り上げた。周囲に砂埃を発生させると同時に、蹴り上げた砂が心の視界に舞い込む。

「ふん、甘いわ！」

心は視界に飛んできた砂を、扇で全て叩き落した。

心の切り札　鉄扇。飛び道具や武器から身を守るための手段で、

常に携帯していた。つまり、心に真正面からの小細工は通用しないという事になる。

「ほっほっほ。此方にそのような小細工など通用せんじや」

心は口元を扇子で隠しながら、サーシャを嘲笑った。

（あの扇……鉄か）

だが、それはサーシャにとって勝機だった。鉄の元素を自在に操るサーシャなら、あの鉄扇を利用しない手はない。

しかし、クエイサーの力は使わないと決めている。とはいえ、大鎌等の大きな武器を練成するわけではない。短剣程度の練成なら、許容範囲だ。

こんな所でクエイサーの力に頼る事になるとは……心を甘く見ていた自分を呪う。だが、サーシャは負けるつもりはない。

もう一度だけサーシャは地面を蹴り上げ、砂を心の視界に向けて飛ばした。

「何度やっても無駄無駄無駄なのじゃ」

同じように、鉄扇を広げて砂を叩き落す心。サーシャはその隙を狙い、鉄扇に手を伸ばした。だが、サーシャの動きに気付いた心は一歩退いて距離を取る。

「なるほどのう。此方の扇子を奪うという寸法か。所詮は猿の浅知恵じゃ　　な!？」

そして心は気付いた。自分の持つ鉄扇の大きな異変に。

心の鉄扇は見事にひしゃげ、一部がごっそりと抉り取られていた。心は何が起きたのか理解が出来ず、冷静さを失っている。

「こ、ここここ此方の扇子が!？な、何がどうなっておるのじゃ!？」

その瞬間が、心の最大の間だった。サーシャは心の背後に回り込み、腕を捻り上げて身動きを封じる。そして、

「　　まだ続けるか？」

4話 一日の終わり、非日常の始まり（前書き）

ついにカーチャ様の登場です！気が付いたら、こんなにたくさんのポイントを頂いていました。読者の皆様、ありがとうございます！

4話 一日の終わり、非日常の始まり

激しい戦いの末、心に勝利したサーシャ。

「すっげえ、不死川心に勝ったぞ！」

「アレクサンドル君、超カッコイ〜!!」

「ざまあみる不死川！」

校庭にいる生徒達から歓声が上がる。生徒達の声は、サーシャ一色だった。体術は互角だったが、サーシャは傷一つ負っておらず、尚且つ心に身体的なダメージすら与えていない。

総合評価的に言えば、サーシャの圧勝だった。

「うう……何なのじゃ。一体何がどうなっておるのじゃ……」

心は未だに状況が飲み込めていなかった。地面に座り込み、泣きべそをかきながら無残に変形した鉄扇を見つめている。

「……………」

勝者となったサーシャは無言のまま心に近づき、心の目を覗き込むようにしながらしゃがみ込んだ。

「ひっ……………」

びくつと身体を震わせて、怯え切った表情でサーシャを見る心。

「……………」

サーシャは表情一つ変えないまま心をじっと凝視する。そして、次の瞬間。

……………。

右手を心の左胸に手を伸ばし、触れた。

。

校庭中 否、全ての時間が一瞬だけピタリと止まったような気が

した。先程まで騒いでいた生徒達も急にしん、と静まり返っている。

「……………あ」

心は自分の胸に置かれているサーシャの右手に視線を下ろす。

「……………」

数秒間沈黙が続く。そして心は今の状況を理解し、ようやく我に返った。

「によわあああああああああああああああああああああああああ
あああああつ!?!」

胸を触られ、顔を真っ赤にしながらサーシャから後退りする。同時に、校庭中の生徒や教師達が騒ぎ始めた。特に男子生徒達が性的な意味で騒ぎ立てている。

「……………」

サーシャは心の胸に触れた自分の右手を数秒間見た後、怯えている心を見下ろし、興味が失せたと言わんばかりの表情で、

『お前の胸では、俺の心は震えない』

ロシア語で心に吐き捨てた。心は言われた意味がよく分からず、近くにいた冬馬に翻訳を頼む。

「……葵君、アレクサンドルは何と言ったのじゃ？」

しかし、冬馬は言いにくそうにしながら苦笑いを浮かべていた。あまり聞かない方がいいですよと忠告するが、それでも心は知りたいと言って頷いた。

「貴方の胸では、私の心は震えない」、だそうです

サーシャのロシア語を、丁寧に訳して伝える冬馬。心にはイマイチ意味が分からなかったが、とりあえず分かった事は明らかに返されているという事だけだった。

「もう色々と悔しいのじゃ！うわ~~~~~ん！！」

負けた拳句に侮辱を受け、それに耐え切れなくなった心はとうとう

泣き出してしまった。

すると、まふゆと華がギャラリィを掻き分け、怒りを露わにしなが
らサーシャの前にやってきた。

「一体何考えてんのよ、アンタはっ！！！！」

まふゆは竹刀で、サーシャの頭を力一杯ぶつ叩いた。

「ここはミハイロフとは違うのよ！無闇に女の子のおっぱいを触ら
ないの！っていうか、普通は私達の学園だろうと何だろうと基本的
にアウトだから！！」

「吸ったわけじゃないから問題はない」

竹刀で叩かれた頭部を擦りながら、反省する様子もなくただ本心を
述べるサーシャ。

「そういう問題じゃねえだろ！ただでさえ目立ってるのに、これ以
上問題起こすなよ！バカかよお前は！！」

流石の華もこれには激怒した。サーシャは後先考えずに直情的に行

動する時がある事は知っていたが、今回は取り返しがつかない。

「こりゃ！何と言う不埒な真似をするでおじゃる！」

まふゆ、華に続いて後からやってきたのは、顔の白い、まるで平安時代にでもいるような人相の教師 綾小路麻呂だった。

ちなみに麻呂に対してのまふゆと華の第一印象は、“うわ、何コイツ気持ち悪”である事は言うまでもない。

麻呂の言う事に対し、サーシャは反論する。

「勝ったのは俺だ。その俺が何をしようがお前には関係ない」

「だまりゃ！これは由々しき問題でおじゃる！アレクサンドルとやら、お前には処分を」

「まあまあ綾小路先生、その辺にしておきなさい」

鉄心がこの場を納めようと、サーシャと麻呂の間に入って割り込んできた。しかし麻呂は納得がいかず、鉄心に抗議を求める。

「し、しかし学長……」

「いわゆる“かるちゃーしょっく”と言っつやっじや。兎に角、この件はワシが一旦預かるう。後でサーシャにはキツク言っておくわい」

鉄心はそう言っつて、一先ずこの騒ぎを納めたのだった。これ以上揉めると家柄的にも厄介なので、学長がそう言っつならと麻呂も身を引くことにした。

こうして決闘は終わり、生徒や教師達がそれぞれの教室へ戻っつていく。決闘が終わっつてもサーシャの話題が消える事はなかつた。

自分達の教室にはとてもではないが戻れない……そう思っつまふゆと華だつた。

そんな中、ガツクリと肩を落とし、教室へと戻っつていく心の後ろ姿を、カーチャは興味深そうに眺めていた。

(……………決めたわ)

カーチャの口元が吊り上がる。まるで獲物を狩るような、狡猾で扇情的な瞳。くすくすと静かに笑いながら、カーチャは校庭を去っつて

いくのだった。

重い足取りで、教室へと戻るまふゆと華。サーシャは特に気にする様子もなく廊下を歩き、二人の先頭をきって2・Fへと向かう。

廊下からは、別のクラスの生徒達の視線を感じる。サーシャはある意味で有名人になった。今日から“おっぱいソムリエ”等と変な仇名を付けられても可笑しくはない。

(……ああ、入りづらいなあ)

とうとう2・Fの教室に辿り着く。まふゆは大きく溜息をついた。

きつとドアを開けば、サーシャは女子生徒達の敵になっているだろう。どうフオローすればいいかまふゆと華は悩んでいたが、もうフオローのしようがないことは明らかだった。

そんな二人の気持ちを余所に、堂々と教室のドアを開けるサーシャ。教室のクラスメイト達が、一斉に視線をサーシャに向けた。そして、

「アレクサンドル、いやサーシャ！お前は最強だ、神と呼ばせてく

れ！」

「なあなあサーシャ、どうやったたらあんな風に堂々と掴めるんだ！？」

「頼む、俺にもその技を教えてくださいよ！」

「不死川の胸、どんな感触だった！？」

男子生徒達の殆どがサーシャに集まってきた。サーシャの勝利よりも、公然の場で堂々と女性の胸を掴んだ英雄として崇められていた。サーシャは返答に困り、群がる男子生徒を掻き分けてその場から脱出する。しかし、今度はサーシャの戦いぶりを見て目を輝かせているワン子とクリスが待ち構えていた。

「見たわよ！サーシャってめちゃくちゃ強かったのね！今度はあたと勝負しなさい！」

「サーシャ。お前の強さ、しかと見せてもらったぞ。が、しかしだ。さっきの行為だけは頂けないな。今後は自粛しろ」

ワンコはサーシャに勝負をふっかけ、クリスはサーシャの戦闘能力を賞賛しつつ辛口のコメントをするのだった。

（面倒な事になった……）

自分がした行いを今になって後悔するサーシャ。だがまふゆや華に助けを求めた所で、“自業自得よ”と言ってあしらわれるのは目に見えている。

「あ、あの……アレクサンドル君。ううん、サーシャ君」

そんなサーシャを見ていた千花が話しかけてくる。決闘での出来事があったのか、少し態度が控えめだった。

この状況はまずいと思ったまふゆと華は、サーシャの前に出て千花に弁解を始める。

「あ、あのね千花ちゃん！あ、あれはなんていうかね……その、悪気があったわけじゃないの！」

「そ、そうなんだよ！こいつの癖って言うかさ……だから」

「よかつたら、アタシのも触ってみる？」

千花から返ってきた言葉は批判でもなければ敵意でもなく、ただ純粹な好奇心だった。意外過ぎる返答を前に、まふゆと華、サーシャまでもが絶句していた。

「え、マジで！？スイーツの胸揉んでもいいのか！？」

千花の言葉を聞いて真っ先に反応したヨンパチが、興奮して息を荒げながら前に出てくる。

「誰がアンタみたいなエロザルに触れて言ったのよ！？アタシはサーシャ君に言ったの！」

ヨンパチを追い払い、千花は再びサーシャを見る。

「サーシャ君、アイツの胸を触った時……何て言うか、不思議と嫌らしさを感じなかったのよね。純粹っていうか」

だったら触ってもらうのもいいかな、と千花は顔を赤らめて、自分の胸をサーシャに近づけた。

「た、だだだだだだだだだだダメよサーシャ！いい、いい、いいくら相手がいいって言っても、ダメなものはダメなんだからね！！」

顔を真っ赤にしながらサーシャに注意するまふゆ。恥ずかしさからなのか、それともヤキモチなのか。気持ちが焦り、まふゆの頭の中はもうごちゃごちゃだった。

そんなまふゆの様子を見て、千花はくすつと笑う。

「なぐんてね、冗談冗談。まふゆっちも本気にしないの、こんなに顔真っ赤にしちゃって」

林檎のように赤く染まったまふゆの頬を、指先で突いてからかう千花。まふゆは「もう！」と、頬を膨らませた。

ともあれ、少なくとも千花達はサーシャの事を悪く思っていないようだった。それどころか、むしろサーシャを愛称で呼ぶ程親しみを持つようになっていた。

これはこれで良かったのだろうと、まふゆはとりあえず安堵したのだった。

こうして、波乱の学園生活一日目は終わった。しかし、こうしてい

る間にも正体不明の元素回路は、なおもどこかで出回り続けている。それを根絶しなければ、川神市に明日はないだろう。

守るべき人達が、ここにいます。だからこそ戦わなければならない。

この川神学園の生徒達　　否。川神市の人々から、平和を取り戻すために。

放課後の事。

心は壊れた鉄扇を強く握り締めて、苛立ちながら廊下を歩いていた。

サーシャに敗北した拳句、その上胸まで触られ、終いにはサーシャにはお咎めなし。当然納得のいかない心は抗議を試みたが、学長権限により一時保留となった。

サーシャが留学生とはいえ、女性の胸を触る文化など聞いた事がない。

「悔しいのじゃ、悔しいのじゃ、悔しいのじゃ……」

負けたおかげで2・Fの生徒からは馬鹿にされ、サーシャに“震えない胸”（要するにがっかりおっぱい）という屈辱的な烙印を押され、プライドをズタズタにされた心は悔しさと怒りで満ちていた。

今度は絶対にリベンジしてやる……そんな事を考えながら歩いていくと、

「によわ!?!」

「きゃっ!?!」

廊下の曲がり角で、誰かと鉢合わせする。勢いよくぶつかり、心は豪快に尻餅をついた。

「いたた……どこを見ておるのじゃ!?!」

ただでさえ苛立っているというのに、一体どこの無礼者だ……半分八つ当たりも含めて、心は怒鳴った。

「いっ、いっめんなやい……」

ぶつかってきた相手はカーチャだった。カーチャも尻餅をついたのか、お尻を擦りながら、涙目かつ上目遣いで心を見上げていた。

（か、かかかかかかかかかかかわゆいのじゃ……………）

無垢な瞳で、まるで妖精のような可愛さに心は心を奪われた。立ち上がり、倒れているカーチャに手を貸す心。

「ま、まあ分かれば良いのじゃ……………ところでお前、見かけない顔じやのう」

「はい。私、聖ミハイロフ学園から転入してきました、1-C所属のエカテリーナ「クラエ」といいます。“カーチャ”って、呼んで下さい。お姉さま」

カーチャはスカートを広げ、礼儀正しく心に一礼する。礼儀作法も美しく、由緒正しい家に生まれたのだらうと心は理解した。

「此方は2-Sの不死川心。由緒ある不死川家の息女じゃ。覚えておくが良いぞ」

「はい、心お姉さま」

元気良く返事をして、心を敬うカーチャ。そんな素直で可愛いカーチャを、心はますます気に入ったのだった。

「あ、あの、心お姉さま。カーチャ、この学園の事がよく分からなくて……だから、心お姉さまに案内して欲しいの。ダメかな？」

上目遣いで、カーチャは心に眼差しを送る。

「良いぞ。カーチャがそこまで言うのであれば、此方が案内してやるぞ」

すぐに帰るつもりでいたが、カーチャに会ってすっかり機嫌を良くした心は、快く承諾した。

「本当？ありがとう、心お姉さま！」

カーチャは飛びきりの笑顔を浮かべて、心に抱き付いた。心の顔が慈愛に満ちていく。

心は早速カーチャの手を引き、学園を案内するのだった。

しばらく心とカーチャは学園中を一通り回った。放課後の学園内はあまり生徒がいない分、心は気が楽だった。

「
」

可愛らしくくるくる回りながら廊下を楽しそうに歩き、無邪気にはしゃいでいるカーチャ。そのカーチャの姿を見て、心は和んでいた。

「……………？ここは何の教室かしら」

廊下の片隅にある教室がカーチャの目に入る。カーチャは扉を開け、中へと入っていく。

「カーチャ。そこは物置じゃ。入っても何も無いぞ？」

好奇心が旺盛な年頃なのだろう。心はやれやれと肩を落としながらも、表情は笑っている。まるで自分に妹が出来たみたいで、嬉しく思っていた。

カーチャの後を追いつ、物置部屋に足を踏み入れる心。中は薄暗く、少し不気味だった。

カーチャの姿はまだ見えない。きつと隠れて自分を脅かそうとして
いるのだな、と心は思った。

が、その直後。

ピシヤッ！！

突然、物置部屋の扉が勢いよく閉まった。変に思った心は扉に手を
かける。

「あ、開かないのじゃ……」

力強く扉を引くが、固く閉ざされたままでビクともしなかった。

薄暗く気味の悪い物置部屋に閉じ込められ、心に不安が生まれ始め
る。早くカーチャを見つけて何とかこの部屋を出よう、そう思った
時だった。

ギィ……………。

い。

アナタスタシアは沈黙したまま、心との距離をゆっくりと縮めていく。

『 (銅よ) 』

一瞬、暗闇の奥から声が聞こえた。その声に反応するように、アナスタシアは両手を上げ、無数の銅線を心に向けて放つ。

「によわ~~~~~!!!!!!」

無数の銅線は心の身体に絡み付き、心を引っ張り上げて逆さ吊りにする。

「うわ~~~~~ん!誰か、助けて……助けるのじゃ……!」

銅線は心の身体を奪い、身動き一つできない。心の思考が恐怖に染まっていく。

すると、暗闇の奥 声のした方向から人影が心に歩み寄ってくる。

それはカーチャだった。カーチャ妖精のような笑顔とは打って変わり、鋭い目付きと、そしてサディスティックな表情を浮かべている。心が放課後に出会ったカーチャとは、まるで別人だった。

「
光栄に思いなさい。今日から私が、お前の主人になってあげる」

自ら主人を名乗り、心をまるで奴隷呼ばわりにするカーチャ。

「な、何をわけの分からぬ事を……そんな事より、さっさと降ろすのじゃ!」

自由の利かない身体を揺さぶり、カーチャを睨み付けて抗議する心。しかし、返ってきたのはアナスタシアの銅線による痛烈な拷問だった。銅線をまるで鞭のように、心の身体に叩き付ける。

「い、痛い、痛い! 痛いのじゃ!」

「それが主人に対する口の聞き方かしら? “どうか降ろしてください、女王様”でしょ?」

まあ、降ろすつもりは無いけどねと付け加え、カーチャは嘲笑う。

「こ、こんな事をして、ただで済むと思うでないぞ！此方は由緒ある不死川家」

「お前がどんな身分だろうと、私の前ではただの雌犬よ」

動揺する様子もなく、カーチャはたった一言で一蹴する。サーシャと同じく、カーチャには家柄や名声は全く通用しなかった。

名門である不死川家　　自分の誇りが、一瞬にして崩されてしまった。

「まだ立場と言うものが理解できていないようね。主人に逆らったどうなるか……じっくりとその身体に刻み込んであげるわ」

氷のように冷たい笑みを浮かべながら、カーチャは逆さ吊りにされた心の頬を撫でるように触る。

「ふふ……覚悟なさい」

そして心の耳元で、優しく、まるで誘惑するように囁いた。

あの無垢で可愛かったカーチャは幻だったのだろうか。今ここにいるカーチャが本物なら、今日という日を迎えた事を心は心底呪った。

悪夢ならすぐにでも覚めて欲しいと切に願いたい。が、この鞭打ちのような痛みは、紛れもない現実だと言う事を認識させる。

心の地獄のような放課後は、カーチャと言う女王の欲望が満たされるまで続くのであった。

4話 一日の終わり、非日常の始まり（後書き）

心が叫んでばかりですね（笑）

これでカーチャ様の奴隷は心になりました。

続いているお話はクエイサーファンなら知っているあの人が登場します！

地獄のち……ごほん。

書きあげるまでに時間がかかりますが、どうぞ応援宜しくお願い致します。

BY マイシャツフルのクエイサー

サブエピソード5「川神院にて」

川神院にて

関東三山の一つ それが川神院。

厄除けの寺院として名高い有名な寺であり、サーシャ達の滞在場所である。

また鍛錬場所としても使われているため、住み込みで訓練をしている修行僧も多い。

初日目の学園生活を終えて、川神院を訪れたサーシャ、まふゆ、華は鉄心に挨拶をする。

「よく来てくれたのう。では、改めて挨拶をするぞい。ワシがこの川神院の代表を務める、川神鉄心じゃ」

「ワタシはこの師範代を務める、ルー・イーです。ようこそ、川神院へ」

鉄心の隣にいるのは、ルー・イー。川神院の師範代である。

サーシャ達は川神院の修行僧に部屋まで案内され、荷物を置いて再び鉄心のいる部屋へと赴いた。

「あれ？サーシャにまふゆ、それに華も!？」

廊下を歩いている途中で、ワン子と遭遇した。ワン子は養子で、川神院で引き取られてここで暮らしている。

どうしてここにいいのか疑問に思っているワン子に、まふゆが理由を説明する。

「私たち、しばらくの間ここでお世話になることになったの。よろしくね、一子ちゃん」

「そうなんだ。うん、よろしく!……じゃあじーちゃんの言った大切なお客さんって、サーシャたちのことだったのね」

ワン子は嬉しそうに、サーシャ達をマジマジと見る。鉄心から話は聞いていたようだが、深い事情までは知らないだろう。

また鬱陶しい奴が来たど、サーシャは目を逸らした。

「そう言う事なら、いつでも勝負ができるわね！あ、ちなみにあたしのことは“ワン子”でいいわ」

明るく、エネルギーッシュなワン子の姿。一緒にいるだけで元気を与えてくれるような存在。

こういう人間は嫌いではない。サーシャはワン子に視線を戻した。

「生半可な覚悟で俺に勝てると思うなよ、ワン子」

「望むところだわ、負けないわよサーシャ！」

サーシャとワン子はライバル視し、火花を散らす。お互いに認め合い、そんな二人を見てまふゆと華は笑う。微笑ましい光景だった。

「……………あ、あたしそろそろ行かなくちゃ！」

ワン子はこの後、日課である走り込みのトレーニングに行くらしい。サーシャ達にまたねと手を振って、廊下を駆けていった。

「一子ちゃんって、努力家だね」

ワン子の後ろ姿を見送るまふゆ。ワン子の直向きな姿勢を、今の自分自身と重ねていた。

「ああ、私の自慢の妹だからな」

突然、三人の背後から声をかけられる。まふゆと華はびくっと身体を震わせ、振り返るとそこには百代の姿があった。いつからいたのだろう、全く気配を感じなかった。

「あ、えっと……あなたは？」

「川神百代だ。3・Fに所属している」

百代はまふゆたちより一つ上の先輩　上級生だった。まふゆ達も会釈して自己紹介をする。

「織部まふゆです。よろしくお願いします、百代先輩」

「桂木華です。どうも……」

「モモ先輩でいい。まふゆに、華か……二人とも可愛いな。どうだ、今夜私の部屋に来ないか？私とイイ事をしよう」

ニヤツと笑いながら、まふゆと華の肩を抱き寄せる百代。冗談で（？）言っているつもりだろうが、それでも何とも言えない複雑な気持ちになる二人である。

（うわ、おっきい胸……）

百代の大きな胸に目がいく。豊満かつ、名前の如く桃のような胸に、思わず見惚れてしまうまふゆ。親友の山辺燈といい勝負かもしれない。

「……………」

当然、サーシャも百代の胸に興味を抱いていた。

確かめたい……心の時と同じように、百代の胸に手を伸ばすサーシャ。

が、

「おっと」

さっきまでまふゆと華の後ろにいた百代が突然姿を消したと思いきや、サーシャの背後に回り込んで腕を掴んでいた。

「そう簡単には触らせないぞ？サーシャ」

まるでずっとそこにいたかのように、百代は平然とサーシャの背後にいる。

(迅い……！いつの間に!?)

サーシャは見えないどころか、気づくことすらできなかった。勿論、驚いていたのはサーシャだけではない。まふゆと華も一瞬の出来事に啞然とする。

「お前の戦い、全部見せてもらった。今度は私と勝負しろ」

サーシャの戦いを見て、闘争本能を刺激された百代はサーシャに興味を持っていた。

ただ純粹に強者を求めるといふ百代の闘気が、サーシャの身体を駆け巡る。

(こいつ……強い！)

サーシャは感じ取っていた。百代の異常なまでの強さを。その強さは、今まで戦ってきたアデプトの使徒とは比較にならない程だ。

クエイサーでもなければ軍人でもない、ただの女子生徒である。サーシャは戦慄した。

「……道理で来るのが遅いと思っとなら、モモ。お前が引き止めておったんじゃな？」

サーシャ達がいつまで経っても来ないので、心配した鉄心が迎えにやってきた。

「じじい、私を今すぐサーシャと戦わせてくれ」

「ならん。これからサーシャ達と話があるんで、お前は部屋に戻っていなさい」

百代は不満そうに顔を顰めるが、しばらく悩んだ末、分かったよと素っ気ない返事をして、サーシャの腕から手を離れた。

しかしその強者に飢えた瞳は、諦めてはいない。百代とはどんな形であれ、戦う事になるだろうとサーシャは理解する。

「まあ、いいさ。だが、いずれは私と戦ってもらおう」

「構わん。俺は負けるつもりはない」

「いい返事だ。お前と死合う日が待ち遠しいぞ、サーシャ」

満足そうに笑いながら、百代はサーシャ達の前から去っていく。そんな百代の様子を見て、鉄心は重い溜息をついた。

「全く、仕方のないやつじゃのう……………」

百代の戦いに対する執着心は、鉄心の悩みの種であった。戦っていないと生きている気がしないとまで言う始末。何か大きな趣味でも持っていれば…………と、つくづく思う。

「あ、あの……あの人は一体？」

百代の事が気になった華が鉄心に尋ねた。

「ん？ああ、あれはワシの孫じゃ。まあ、ああいう奴じゃが、仲良くしてやってくれ」

そう言って、鉄心は苦笑いする。

「……さて。ここで長話もなんじゃから、そろそろワシの部屋に行こうかの」

鉄心が部屋へ来るように促す。これから、任務についての詳しい話を聞かなければならない。サーシャ達は鉄心と共に歩きだした。

(川神、百代……)

サーシャは百代が去っていった廊下を振り返る。

百代の戦闘能力は計り知れない。少なくとも、本気で戦わなければ勝てない相手である事は確かだ。

武神 川神百代。その圧倒的なまでの存在感は、サーシャの心を“震わせて”いた。

サブエピソード5「川神院にて」(後書き)

以上、サブエピソードでした。ちなみにサーシャは百代に恋心を抱いているわけではないです><

サブエピソード6「百代の好奇心」

百代の好奇心

満月が夜空に上り、月明かりが川神院の道場を照らしている。

百代は一人佇み、目を閉じて精神を研ぎ澄ませていた。

勿論、百代が好きでやっているわけではなく、心の修行という一環で鉄心から強要されていた。

(サーシャ……ああ、早く戦ってみたい)

しかし、修行の成果は出ない。むしろサーシャが現れた事により、より一層心が荒ぶり始めていた。

ここ最近、サーシャのような強者に出会った事があっただろうか。

百代に挑戦する者は数秒持たず敗れ去り、満たされない日々が続いていた。

それ故に、サーシャはある意味で“救い”なのかもしれない。

百代にあるこの飢えと渴きを、満たしてくれるかもしれないのだから。

「いい月夜ですね、百代さん」

背後から声をかけられ、意識を引き戻された百代は後ろを振り返る。そこに立っていたのはユーリだった。

「……あなたは？」

百代は不信感を抱く。黒い服に身を包み、右目には眼帯。明らかに怪しかった。

そんな百代の不信感を察し、ユーリは答える。

「決して怪しい者ではありませんよ。私は極東正教会、第四管区巡回司祭・聖ミハイロフ学園付設聖堂責任者、ユーリ＝野田です。お話は鉄心さんから聞いていますよ」

無駄に長い自己紹介が、百代の耳から耳へとすり抜けていく。とりあえず分かった事は神父であるという事だけだ。

それともう一つ。聖ミハイロフ学園の聖堂と言う事は、サーシャ達の関係者だろう。

「聖ミハイロフ……確か、サーシャ達もその生徒でしたね。お知り合いですか？」

「ええ。まあ、保護者みたいなものです」

ユーリは笑みを浮かべ、夜空を見上げた。本当に良い月ですね、と満月を眺めている。

保護者……容姿的な意味合いで説得力がないが、世の中には色々な人間がいるという事で、百代はこれ以上の詮索をやめた。

(それにしても、全く気配を感じなかった。この人は一体……)

一体、何時からいたのだろうか。百代が道場にいた時は誰の気配もなく、一人だった。

しかし、ユーリは百代の背後にいた。いくら精神を統一していたとはいえ、人の気配くらいは察知できる。仮に気配を消したとしても、百代なら微弱な気すら察知できるはずだ。

なのに、ユーリからは一切の気を感じない。あり得ない。

まるで、初めから“そこ”にいないような、虚無の存在のように。

「…………おや？」

百代が険しい表情でユーリを見ていたので、気になったユーリが視線を向ける。

「どうなさいました？私の顔に、何かついていますか？」

「あ、いえ。別に…………」

百代は慌てて目を逸らした。しかし、ユーリはそのまま問いかけを続ける。

まるで、百代の抱いている疑問を見透かすかのように、答えた。

「それとも……私の気配を感じなかった事が、そんなにも不思議ですか？」

「……………っ！？」

背筋が、ぞわりとした。

ユーリの問いに、百代は本能的に身構えていた。警戒をさせてしまったか、と思ったユーリは透かさずフォローを入れる。

「いやあ、どうも私は存在感が薄いようですね………周りからもよく言われるんですよ」

言って、百代に苦笑いで返すユーリ。あまりの余所余所しい態度に、百代は身構えていた自分が馬鹿馬鹿しくなり、警戒を解いた。

「……………ユーリさん、ちょっとお尋ねしたいのですが」

百代は思った。聖ミハイロフの関係者なら、サーシャの事を知っているかもしれない。

「構いませんよ。できる範囲でお答えします」

ユーリは快く承諾した。百代は早速答える。

「サーシャは、一体何者なんですか？」

。

ほんの一瞬、沈黙が走った。だが、ユーリは表情を変えることなく受け答える。

「彼はロシアからの留学生で、飛び級で進学してきた優秀な生徒だと聞いています。それ以外は何も」

「本当にそれだけですか？」

「ええ。私は聖堂を管理しているだけです、学園内の事はあまり詳しくないのです」

あくまで管理者であると、ユーリは答えた。

どことなくだが、白々しさを感じた百代は、更に追求を図る。

「川神学園のシステムはご存知ですか？」

「確か、生徒の間で揉め事があると、決闘して白黒をつける……そう聞いています」

ユーリの表情は未だ変わらない。百代はついに、今日起きた決闘での出来事を切り出した。

「今日、昼休みに決闘がありましたね。戦ったのはうちの生徒と……サーシャです」

「」

ユーリの表情がほんの僅かに崩れたのを、百代は見逃さなかった。やはり、ユーリは何かを隠している。

「サーシャの並外れた戦闘力。見た所、ただの留学生とは思えません」

百代はサーシャと心が決闘した様子をユーリに説明する。

滑らかな動き、体術。そして、心の鉄扇を破壊したあの異能の能力。観戦していた生徒達の殆どは、手品か何か、もしくは誰も気にしてはいなかっただろう。

だが、百代だけは違った。あれは“普通”の人間が成せる技ではない。そしてユーリもその例外ではないと確信する。

すると、しばらく沈黙を守っていたユーリが、ようやく口を開いた。

「仮に私が知っていたとして、あなたはどうするおつもりですか？」

「理由は特にありません。単なる好奇心ですよ。それに、ユーリさんもただの神父ではなさそうですよ。」

身構え、戦闘態勢に入る百代。本能が叫ぶ。ユーリを強者と認識し、血が騒ぎ立てていた。

こいつは、強い。戦って培ってきた武神の勘が、そう告げている。

「はっはっは、考え過ぎですよ。私はどこにでもいる、ただのしが

ない神父です」

当然、ユーリに戦闘の意思はない。それでも百代は諦め切れなかった。ようやく目の前に現れた強者を、ここで逃すわけにはいかない。

百代の心が、本能に浸食されていく。まるで、闘いに飢える獣のよう。

「手合わせ願えますか？私が勝ったら、サーシャの事について教えてください」

「断る、と言いましたら？」

ユーリの返答に、百代はニヤリと笑った。

「その気にさせるまでです」

瞬間、百代はユーリとの距離を縮め、正拳突きを放った。拳をユーリの腹にめり込ませ、身体ごと吹き飛ばす。

はずだった。

「!?」

今まで自分の前にいたユーリの姿が、消えている。

百代は動揺した。手応えを感じない上、かすりもしない。まるで幽霊を相手にしているような、気味の悪い感覚に襲われる。

「血気盛んなのは結構ですが」

何時の間にか、百代はユーリに背後を取られていた。だがユーリは構えず、両腕を後ろに組んだまま、微動だにせず佇んでいる。

「女性が暴力を振るうのは、あまり宜しくありませんね」

完全に舐められている。今まであらゆる敵を倒し、武神と呼ばれた百代にとっては最大の屈辱だった。咄嗟に背後を振り返ると同時に、回し蹴りを放つ。

「はあああああー!!」

百代の鋭く、重い蹴りがユーリを襲う。だがユーリは臆することな

く、攻撃を難なく回避する。

「まだまだあああ!!」

百代の攻撃は続く。怒涛の連撃でユーリを圧倒するが、攻撃は一度も当たらない。

まるで、手の内が全て読まれているかのよう。

(くそっ……!)

一度後退し、体制を立て直す百代。一方のユーリは涼しげな表情をしたまま、百代を見据えている。

追い詰めているはずなのに、逆に追い詰められている。百代は焦りを感じていた。

同時に生きているという実感が身体中を震え立たせ、この状況を愉しんでいるようにも見える。

百代は今、満たされつつあった。

「私に、この眼帯を外させる気ですか？」

ドクン。

刹那、空気が変わる。百代の本能が危険であると察知した。

それは、死の予兆。百代の心臓が激しく脈打ち、忘れ掛けていた感覚を思い出させてくれる。

(久方ぶりの感覚だ……震えが止まらない!!)

自分では抑えきれないくらい、闘争心が膨れ上がっていた。百代は全力を注ぎ、ユーリに再び挑む。

「川神流奥義!! 富士砕」

「やめいいいいいい!!!!!!」

百代が拳を突き出すと同時、百代とユーリの間には鉄心が割り込んできた。百代の拳が、ピタリと鉄心の寸前で止まる。

「お前の気を感じて此処へ来てみれば……モモ。これは一体どうい
うことじゃ!？」

「どげじじい! 邪魔をするな!!」

百代には、ユーリという目の前の敵しか見えていない。聞き分けの
悪い百代に、鉄心は大きく息を吸い込み、

「いい加減にせんか!!!!!!!!!!!!!!」

闘気の入り混じった喝を百代に入れた。百代は我に返り、荒れ狂っ
ていた獣のような心が徐々に落ち着きを取り戻していく。

しばらくして、百代は拳を下ろした。反省しているのか、視線を地
面に落としている。

平常心を取り戻したと分かると、鉄心は小さくため息を漏らす。

「……もう良い。モモ、お前は部屋に戻っていなさい」

「……悪い、じじい。少し暴れ過ぎた。ユーリさん、先程のご無礼、お許しください」

百代はユーリに頭を下げて謝罪すると、背を向けて道場から去っていった。

「……孫がとんだ迷惑をかけてしまいましたな。誠に申し訳ない」

「いえいえ、おかげで良い運動になりました」

ユーリは特に気にしている様子はなかった。それよりも、百代と戦闘しているにも関わらず、ユーリは傷一つ負っていないという事実、鉄心は驚きを隠せずにした。

「しかし、驚きましたな。モモの攻撃を受けて無傷でいるとは」

「偶然ですよ。私も避けるのがやっとでした」

ユーリは苦笑いしながら答える。

「ふむ……それにしても、このままではいかんかう」

鉄心は顔を俯かせながら、眉間に皺を寄せ、独り言のように呟いた。

「百代さんの事ですね」

「うむ、最近のモモは戦いに囚われ過ぎておりましてな。今でも戦いに飢えておる……」

鉄心の心配は尽きない。百代の精神面は危険な状態にあった。このままにしておけば、何をするか分からない。

「その件についてはご心配なく。既に手は打ってあります」

ユーリはこうなる事を予測し、手を回していた。

百代が危険な相手である事は鉄心から報告を受けている。それなら、百代と対等に戦える相手を用意すればいい。

それは、サーシャ達に危険が及ばないようにするのが本来の目的だが、同時に百代を更生させるための手段でもあった。

「ほう。それでアタシを呼んだってわけかい」

道場に響く女性の声。鉄心とユーリが視線を向けたその先に、彼女はいた。

修道服に身を包んだ、引き締まった体格の女性。彼女こそ、ユーリが手配した人物であった。

「ええ。厄介な仕事ですが、宜しくお願いします」

女性は拳を鳴らし、息を殺し、百代との戦いを待ち続ける。

アトス最強の戦術教官が今、この川神市の大地に降り立った。

サブエピソード6「百代の好奇心」(後書き)

更新が遅くなりました。名前はまだ出しませんが、あの人が登場しました。

ユーリが強いという設定で構成しました。原作では眼帯を外さずに終わったのですが、強さがよく分からないので結局外していません(笑)

また文章が長いので、サブエピソードで分けています。本編まで今しばらくお待ちください。

サブエピソード7「女王様と心1」

女王様と心1

カーチャの地獄のような時間からようやく解放された心は、無事に自分の家　不死川邸へと帰宅した。

(うう……身体のおちこちが痛いのじゃ……)

アナスタシアに捕縛され、銅線による鞭打ちを受け、身体中　特にお尻の部分を集中して叩かれていた。身体が痛みで悲鳴を上げている。

『　いいこと心。今日から放課後、毎日ここへ来なさい。もし来なかったら……分かってるわね?』

帰り際に言われたカーチャの言葉が蘇る。心は毎日来るように命令されていたのだった。

その場では頷くしかないと思った心だったが、当然行くわけがない。

(父上に言つて、あの女狐を退学にさせてやるわ……ほっほっほ、此方を敵に回した事を後悔させてやるのじゃ)

心の中で静かに笑いながら、心は機嫌を取り戻しつつ、家の玄関を開ける。

「今帰つたのじゃ」

心が帰宅すると、何人もの侍女達が整列し、心を出迎えていた。

「お帰りなさいませ、心様。お荷物をお持ちいたします」

「うむ」

侍女の一人に荷物を渡し、自分の部屋に向かう心。今日の事は忘れて、早く眠りにつくろう……そう思った時、別の侍女に声を掛けられる。

「心様。お客様がお見えになっています」

「客じゃと？此方にか？」

「はい。あちらに」

侍女が客間のある部屋を指し示す。一体誰だろう、と心は首を傾げつつ客間へ向かう。

すると、客間の扉が勢いよく開き、不死川家を訪ねた“客”が姿を見せた。

「心お姉さま!!」

心の視界に飛び込んだのは、妖精のような容姿で、天使のような笑顔で出迎えるカーチャの姿だった。

カーチャは心に飛び込むように抱き付いて、嬉しそうに頬を擦りつけている。

「な、なななななななななななななな……」

放課後の出来事が、フラッシュバックして心の脳内から蘇ってきた。

まだ夢を見ているのだろうか。もしくは帰る家を間違えたのだろうか

か。どの道、心の現実逃避である事に変わりはない。

心に抱きついている彼女は、間違いなくカーチャである。

「ど、どどどどどいう事じゃ！？何故お前がここにいるのじゃ！
？」

錯乱しながら、侍女に説明を求める心。すると、代わりにカーチャが答えた。

「カーチャ、しばらくここでお世話になる事になったの。それまでずっと心お姉さまと一緒になの。だから、カーチャすつごく嬉しい！」

カーチャの笑顔が眩しい、というか恐ろしい。心は滞在の話など全く聞いていなかった。

それが真実というなら、カーチャと一つ屋根の下で暮らすことになる……考えただけでもおぞましい。

「心様。この方はロマノフ家の末裔、エカテリーナ＝クラエ様でございます。大切なお客様ですので、決して粗相のないようにと、旦那様が申しておりました」

と、侍女が補足して説明する。

ロマノフ家　ロシア帝国を統治していた皇室であると、心は世界史の授業で聞いた事があった。

その末裔こそが、カーチャである。こんな若い少女が……信じられない。

(……………ふふ)

カーチャの天使の笑みが、悪魔の笑みに切り替わる。勿論、それは心にしか見えていない。

心は今すぐにもカーチャを追い出してしまいたかった。が、父親の客である以上、それは絶対にできない。尊敬している親に対する裏切り行為だ。

「くっ……………」

こうなってしまうのは、心に決定権はない。心は渋々カーチャの滞在を認めるしかなかった。

「そ、そうか……此方も嬉しいのじゃ。ほ、ほっほっほ」

心にもない事を言う心。もうこの場で泣いてしまいたかった。

「……カーチャの部屋は用意できておるのか？」

「はい、すぐにご案内致します」

侍女に確認を取ると、カーチャは荷物を運ぶように指示を出した。

とりあえず、カーチャの機嫌だけは取っておこう。少しでも機嫌を損ねれば、被害を受けるのは確実に自分だ。

すると、カーチャが心の着物の袖を引っ張り、何やら照れ臭そうな表情を浮かべている。

「あ、あのね。心お姉さま……」

上目遣いで、何かを訴えるように心を見つめるカーチャ。何故だか、心にはもう嫌な予感しかしなかった。

「な、なんじゃ？」

「カーチャね、心お姉さまと一緒に部屋がいい。カーチャ一人じゃ寂しいし……怖い」

カーチャの要望に、心の背筋が凍りついた。カーチャと一緒に過ごす上に、同じ部屋で寝るなど、命がいくつあっても足りやしない。

(此方はお前と一緒にいる方が怖いのじゃ……！)

もし一緒に部屋になれば、カーチャの天下だ。それだけは避けたいと思った心は、必死になって阻止を試みる。

「そ、それなら心配いらなのじゃ。カーチャの部屋に侍女を側につけよう。それなら寂しく」

ぎゅっ。

再び、カーチャが抱き付いてきた。すると、スカートポケットから何かを取り出し、心にしが見えないように、“それ”をちらつかせた。

「なっ……！」

心は言葉を失った。

それは、心がアナスタシアに縛られ、鞭打ちされている時の写真だった。何時の間にか、カーチャに撮られていたらしい。

「主人がお前の部屋に行つてあげるつて言ってるのよ。それともいのかしら？このあられもない姿をしたお前の写真を、学園中には撒いても」

心にしか聞こえないように、静かに囁くカーチャ。

「うっ……うっ……」

脅迫され、心は何も言い返せなくなった。ここでカーチャの頼みを断れば、この写真が学園内にばら撒かれ、心の評判は一気に変態の域に墮ちるだろう。

つまりそれは、不死川家に泥を塗る事を意味する。そんな事態になれば学園中の笑いにされ、おまけに2・Fの生徒達からは永遠にネタにされることは間違いない。

心にとって、とても耐え切れるものではなかった。

「……………カーチャの荷物を此方の部屋まで持っていくのじゃ」

心は自分の部屋にカーチャを入れる事を選択し、侍女に指示をする。これも自分の名誉……………不死川家の名誉を守る為なら、致し方ない。

「かしこまりました。では、エカテリーナ様のお荷物をお運び致します」

侍女は心とカーチャに一礼をすると、この場から立ち去っていく。心は侍女の姿を見送った後、再びカーチャに視線を戻した。カーチャは目を輝かせながら、ニッコリと笑顔を見せる。

「わああああ……………ありがとう心お姉さま！お姉さまとなら、カーチャ寂しくない！」

無邪気に喜ぶカーチャだった。それとは対象に、心はガタガタと身体を震わせている。

この場に残っている侍女達には、微笑ましい光景に見える事だろう。

だが、心には悪い夢としか思えなかった。

「早くカーチャを部屋まで連れて行って……心お姉さま」

カーチャの声のトーンが低くなる。心は悟った、もう逃げ場はないのだと。

こうしてカーチャとの壮絶な一夜が、幕を開けようとしていた。

サブエピソード7「女王様と心1」（後書き）

カーチャ×心エピソードの第一弾です。

次第にエスカレートしていく予定ですが、過激度は抑えます。できるだけエロは避けたいですが、だいぶ無理がありますね。だってク
エイサーだもの……

サブエピソード8「ヨンパチの災難」

ヨンパチの災難

夕日が上る、ある放課後の日の事。

ヨンパチはカメラを持ち、プールサイドの隅で息を潜めていた。

目的は勿論、水泳部の女子生徒のスクール水着姿を盗撮する為である。

(うっひっひ……ああ、いい眺めだぜ)

準備体操をする水泳部の女子生徒達を堪能しながら、はあ、はあ、と息を荒げていた。

スクール水着からくつきりと見える、女子の身体のボディライン。特に胸の部分が強調されている所が嫌らしく、男の本能を刺激する。

ヨンパチは思った。これは良い極上のオカズになると。

(さすがにアイツも外までは監視できねえだろ)

華が番長役になったおかげで、クラスの女子生徒達の盗撮が困難を極めていた。

だが、クラス以外なら監視の目は当然届かない。女性の美を追求するヨンパチに“諦め”という文字はなかった。

(よし……………)

カメラを構え、盗撮のスタンバイをする。万が一の退路は確保済み。後はアングルを決めて激写をするだけだ。

「それにしても、でっかいおっぱいだよなあ……………ああ真剣マキマキでしゃぶりつけてえ」

ヨンパチは水着の女子生徒の一人を見て思わず感想を漏らす。

その女子生徒は見事なまでに巨乳だった。今にも水着がはち切れてしまいそうなくらいの大きな乳は、準備運動をする度に激しく揺れ動く。

（　　きたあああああ！！）

ヨンパチの目が光る。今こそシャッターチャンスの時。ヨンパチはカメラの照準を合わせ、巨乳が揺れた瞬間を狙い撃つ。

「　　ちよつと聞きたいんだが」

シャッターを押す寸前で後ろから声をかけられ、思わずヨンパチはビクリと身体を震わせた。

盗撮がバレた……恐る恐る背後を振り向くヨンパチ。

「ひっ」

小さな悲鳴が上がる。ヨンパチの背後に覆い被さるようにして立っていたのは、黒の修道服に身を包んだ、シスターだった。

鍛え上げられた鋼の肉体。引き締まった服直筋。そして、ヨンパチの2倍以上はあるう背の高さ。どちらかと言えば、体格の良い巨漢と呼ぶ方が相応しい。

その圧倒的なまでの存在感に、ヨンパチの腰が思わず退ける。

「え、あ……はい」

「この学園の職員室はどこにある？」

巨漢のシスターが尋ねる。どうやら学園を訪ねてきた客人らしい。

とりあえず、ヨンパチは職員室の場所を教えた。盗撮の事を気にしている様子はないが、一刻も早くここから立ち去らなければ、とヨンパチの勘がそう告げている。

「じゃ、じゃあ俺はこれで……」

役目を終えたヨンパチは、プールサイドから逃げるようにして立ち去ろうとする。が、

「まあ待ちな」

巨漢のシスターが背後からヨンパチの制服の襟を掴み、引き止める。

「お前、そんなに女性のおっぱいが吸いたいのかい？」

巨漢のシスターは、ヨンパチが喋っていた一部始終を聞いていた。ヨンパチは答える。

「そりゃあもう！揉みまくって、しゃぶりまくって、吸いまくってや
あ」

またしても本音を漏らしてしまい、慌てて口を紡ぐヨンパチ。やはり、自分の性の本能には逆らえなかった。

すると、巨漢のシスターはヨンパチの襟から手を離し、解放する。

何やら不穏な空気が漂う……ヨンパチはそう感じた。

「そうか。そんなに吸いたいのなら、アタシが思う存分吸わせてやるっじゃないか」

そう言って、巨漢のシスターは胸を覆っていた服の部分を引き剥がし、

「さあ　お吸い！……！」

その筋肉質なボディを、ヨンパチの前で曝け出した。

「
」

ヨンパチの目に映る、巨漢のシスターのむっちりとした、豊満な胸。まず巨乳であることには間違いないだろう。

しかも素肌から直に見る“それ”は、男にとって誰もが夢見る（ゲイなど一部を除き）理想郷。それなのに、興奮や性欲よりも恐怖が先に支配していた。

ある意味でヨンパチは、“それ”から目を逸らせずにいた。

まるで、蛇に睨まれた蛙のような感覚。恐怖で震え、固まったまま動けない。

巨漢のシスターは両手でヨンパチの頭をがっちりと掴み、自分の胸へと近づけていく。

「吸え！吸うんだよ

！」

サブエピソード8「ヨンパチの災難」(後書き)

ビッグ・ママ、初登場です。そしてヨンパチオワタ(^o^) /
このシチュエーションはクエイサー?の11話が元ネタです。気にな
る人は見てみてください。

次はいよいよ話で、ワン子・クリス・京VSビッグ・ママの戦い
が始まる予定です!サーシャ達の出番は、まだ先になります……(涙)

5話 川神市の中心で“ア、ーイツ！”と叫ぶ(前書き)

サブエピソードでワン子・クリス・京VSビッグ・マムの対決を予告したのですが、話が長くなったので次の回になります。すみませ
ん……………

「6話 激突、武士娘！」で連続バトルに入ります。御期待下さい。

5話 川神市の中心で“アーイツ！”と叫ぶ

サーシャ達が転入してから早一週間が過ぎた。

川神市に流出している謎の元素回路エレメンタル・サーキットの手掛かりは未だ掴めず、進展はない。

サーシャ達が調査しているエリアは親不孝通り。その名の通り治安が悪く、如何わしい店やドラッグの密売が頻繁に行われている。しかし、元素回路に関しての情報は全くない。

サーシャ達の調査は、困難を極めていた。

朝のHR前、サーシャ、まふゆ、華の三人は現在作戦会議&現状報告の最中である。

「見つからないわね、元素回路」

まふゆは肩を落とし、窓の外を何気なく眺めていた。まふゆはサーシャと同行し、親不孝通りを見て回ったが、ドラッグの常習犯を一人捕まえただけで、それ以外は何も起こらなかった。

「あたしもカーチャ様と周辺を探ったけど、進展なしだぜ……っというかカーチャ様、てつきり川神院に来ると思ってたのに、滞在場所が別だなんて……」

華は別の意味で肩を落としていた。カーチャの滞在場所は別で手配したらしく（カーチャが勝手に決めた）、華に置き手紙を残して去っていったという。

ちなみに置き手紙の内容は、

『お・あ・ず・け？』

と、カーチャの似顔絵とこの四文字だけである。要するに放置プレイという奴だ。

「我慢しろ。聖乳ソーマなら俺が変わりに吸ってやる」

サーシャが腕を組み、真顔で答える。華はねーよ！と言って機嫌を損ねるのだった。

「ったく……お？」

ふと、華の目に留まったのはヨンパチの姿だった。ヨンパチは自分の席に座ったまま、何もせず大人しそうにしている。

いつもならカメラを持って盗撮を図るのだが、今日はカメラを持参してない上、やけに物静かだった。

何か企んでいる……華はニヤリと笑い、早速からかいに行く事にする。

「やけに大人しいなヨンパチ。今日はカメラ持っていないのかよ？」

嫌味のように、話かける華。しかしヨンパチは黙ったまま、まるで電池の切れた機械のように無機質な表情を浮かべていた。無視されたような気がして、華はヨンパチを睨み付ける。

「おい、聞いてんのか？」

「……………」

それでも、ヨンパチの態度は変わらなかった。不思議に思った華はヨンパチの顔を覗き込むように見る。ヨンパチの表情はまるで感情

のない人形のようにだった。

「あれ、どうしたの桂木さん」

華に声をかけてきたのはモロだった。側には岳人もいる。

「それがよ。ヨンパチのやつ、声かけても何の反応もしないんだぜ？コイツどうしちゃまったんだよ」

無反応なヨンパチの身体を指で突く華。しかしそれでも反応は返ってこない。

すると岳人がヨンパチの前に出てくる。

「昨日AV見て抜き過ぎたんじゃねえの？ま、こいつを見りゃ元のヨンパチに戻るって。ヨンパチ、例のヤツ手に入れてきたぜ」

岳人が手に持っていた紙袋の中に手を突っ込み、一冊の本を取り出した。

『豊作！美少女巨乳乱獲祭！〜もぎたて夏の果実たち〜』と書かれたタイトルの本だった。表紙には巨乳の水着美少女達が恍惚な表情

をして写っている。

要するに、エロ雑誌だった。

岳人は早速雑誌をパラパラと捲り、特集ページをヨンパチの目の前に突きつける。

「
」

ヨンパチの表情が、僅かに動いた。目の焦点が雑誌に集中する。徐々に身体が震え、男としての本能がヨンパチを震え立たせ、

「うわあああああああああああああああああああ！！！！おっぱい怖いよ！！！！！！！！！！」

そして恐怖と共に、悲痛の雄叫びを上げた。それと同時にモロと岳人……クラス全員が驚愕し、揃えて声を上げる。

「ええええええっ！？ちよっと待ってよ、一体何があったのさヨンパチ！？」

ヨンパチの豹変が信じられず、モロは驚きを隠せなかった。岳人も

予想外の反応に面食らい言葉も出ず、持っていた雑誌を落として口をあぐりと開けている。

常に女性の美を追求し続けてきたヨンパチ。24時間セックスの事しか考えていないと豪語していたヨンパチ。

そんな彼から女性の胸に恐怖を抱くなどと、一体誰が予想できただろうか。できるはずがない。

「二人とも、何かあったの？」

騒ぎを聞いて京がやってくる。

「京、ヨンパチがおかしくなっちゃった……」

岳人はヨンパチを指差す。ヨンパチは恐怖に震えていた。

「ふーん」

興味なさそうにヨンパチを見る京。すると、京は岳人が落とした工口雑誌を拾い上げ、

「ほーれ」

再び特集ページをヨンパチに突き付けた。

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

ヨンパチは恐怖のあまり、机の下に隠れてしまった。

「うん、重症だね」

「京、それ面白がってやってるよね!?!」

モロの突っ込みが入る。京はくくく、と笑うと自分の席へ戻っていた。確信犯である。

「皆さん、もうすぐウメ先生が来ますよー!!」

予鈴のチャイムが鳴り、真与が生徒達に声をかける。生徒達はすぐに席へ戻り、朝のHRの体制に入った。

教室の扉が開き、梅子が入ってくる。委員長が号令をかけて挨拶をすると、いつものように朝のHRが始まった。

「おはよう諸君。朝のHRを始める」

梅子は一通りの連絡事項を手短に生徒達に伝え、早めにHRを切り上げた。咳払いをし、もう一つの連絡事項を生徒達に伝える。

「それと1時限目の体育の授業だが、今日は特別講師に来てもらっている」

と、梅子。クラス全員がざわつき始めた。梅子は「静粛に！」と鞭を捌き、場を沈める。

「その方は多くの戦場を潜り抜けてきた戦いのプロだ。存分に鍛えてもらうといい……では教官、宜しくお願いします」

梅子は教室の扉に向かって声をかける。

聞こえてきたのは足音。梅子とは違い、重苦しく、押し掛かってくるような威圧感があった。

そして、教室の扉が勢いよく開く。現れたのは黒の修道服を着た、引き締まった体格を持った巨漢の女性。

そう　その正体はサーシャ達の師匠、ビッグ・ママだった。ビッグ・ママは堂々と教室に入り、足音を立てながらクラスの生徒達と向き合った。

「紹介しよう。この方はとある養成所から派遣された格闘及び戦術教官、ビッグ・ママ講師だ」

ビッグ・ママを紹介する梅子。ちなみに養成所名は匿名で出すようにと、アトス関係者から指示を受けていた。

「」

クラスの生徒達は全員、目を見開いている。ビッグ・ママの圧倒的な存在感に、声も出せなかった。

「し、師匠!?!」

「「ビッグ・ママ!?!」」

えええええ!!」

ヨンパチの感情は恐怖に支配されている。もはやビッグ・ママがトラウマになってしまっていた。

「福本、お前また何かやったのか!?!」

梅子が問い質そうと鞭を構える。が、ヨンパチはおっぱい怖いと連呼するだけで、とても受け答えできるような状態ではなかった。

すると、ビッグ・ママが変わりに答える。

「なに、女性のおっぱいがどうしても吸いたいというもんだから、アタシのを思う存分吸わせてやっただけの話さ」

「は、はあ……」

ビッグ・ママは自分の胸を強調するように述べる。梅子もそれで納得するしかなかった。

一方、そんなビッグ・ママの姿を見た男子生徒一同に悪寒が走る。

あの巨漢に無理やり胸を吸わされて……男にとっては羨ましいシチュエーションの筈なのに、何故だか恐怖を感じていた。

「……さて」

ビッグ・ママが再び生徒達に向き直る。

「お前たち、何をぼさつと突っ立っているんだい！さっさと表へ出る準備をするんだよ！」

怒号のような声を撒き散らし、生徒達に指示をするビッグ・ママ。生徒達は動揺し、どうしていいかおろおろしている。

「ん？」

ビッグ・ママは窓際の方へ顔を向けると、窓から身を乗り出そうとしているキャップの姿を発見した。キャップと目が合う。

「やべっ」

キャップは次の瞬間、そのまま窓から飛び出し、逃走を図る。授業

の内申を捨てている、キャップにしかできない行為だった。

「こら、風間！……全く、仕方のないやつだな。教官、あれはもう放っておいて構いません。早く授業を」

「面白いじゃないか」

ビッグ・ママは両手を鳴らし、キャップが逃げた方角を見てニヤリと笑った。どうやら捕まえる気ではないらしい。

「度胸だけは認めてやろう。だが、所詮はヒヨっ子。このアタシから逃げようと思った事をたっぷりと後悔させてやる！！」

“ア……イッ！”と声を上げて、窓ガラスを豪快に割って飛び出すビッグ・ママ。梅子が止めに入るが時既に遅し。ただ呆然と見ている事しかできなかつた。

「へっ。キャップがそう簡単に捕まるかよ」

腕を組みながら岳人が笑う。“気まぐれな風”と呼ぶだけあって、キャップは早い。唯一捕まえられる人間といえば、百代ぐらいしかいないだろう。

捕まえられないはずがない、クラス全員もそう思っていた。

「…………無理だ」

ボソツと、サーシャが呟く。サーシャはビッグ・マムの恐ろしさを知っているが故、結果はとうに見えていた。

「確か、サーシャの師匠なんだよね。あの人ってそんなに凄い人なの？」

大和が訪ねると、サーシャはゆっくりと頷いた。あのクールなサーシャの表情が、恐怖の色で染まっている。

「例えどこへ逃げようと…………師匠は地獄の果てまで追ってくるぞ」

「大丈夫だよ。まあ見てれば分かるって」

大和と、クラス全員がキャップの逃走劇を見物しようと窓から顔を出した次の瞬間、

「ア——————」

「イッ！！！！！！！！！！」

ビッグ・マムの声と共に轟音が校庭に響いた。あまりの声の大きさに思わず耳を塞ぐ生徒達。何が起きたのだろうと再び窓を覗いた時には、キャップとビッグ・マムの姿はなかった。

何故なら、ビッグ・マムは既に教室の窓から乗り込んでいたのだから。

そしてその脇には……キャップが抱えられていた。顔には×印のような痣があり、ぐったりとした表情で力尽きている。

その光景に、クラス全員……梅子までもが驚愕していた。ビッグ・マムは抱えていたキャップを床へ投げ捨てる。

「うえ……この人、強え……」

キャップのかすれ声が聞こえる。キャップは最後まで逃げきれず、ビッグ・マムの制裁を受けていた。

「う、嘘だろ……キャップが捕まるだなんて」

岳人は信じがたい光景を前に啞然とする。あの風のようなキャップが捕まった……それはクラス全員を戦慄させた。

そしてビッグ・ママは生徒達を見て叫ぶ。

「いいかよく聞きな、ヒヨっ子ども！！アタシが来たからには、お前たちのぶつたるんだ空気をぶっ飛ばしてやる！！！」

ビッグ・ママの喝が生徒達を震撼させ、2・Fの空気を支配していく。

「分かったら準備をして外へ出な！！！」

「……は、はい！！！」

生徒達は声を揃え、ビッグ・ママの指示に従った。

キャップが捕まった以上、もうビッグ・ママから逃れる事はできない。それを見せつけられた生徒達は一時限目の授業の準備をすると、一斉に更衣室へと向かっていった。

「……素晴らしい統率力です。感服いたしました」

ビッグ・マムの指導力を見せつけられ、教師としての未熟さを知った梅子。まだまだ自分も修行が足りないと感じる。

「うむ。さて……まずはこの学園の生徒達がどれ程のものか、調べないといけないね」

右手をわきわきと鳴らすビッグ・マム。川神学園のレベルが如何なるものか……戦術教官であるビッグ・マムとしては、興味があった。

もつすぐ、1時限目の授業が始まる。この学園に、早くも暗雲（別の意味合いで）が立ち込めようとしていた。

6話 激突、武士娘！

体操服に着替え、準備を終えた2-Fの生徒達は校庭に集まり、授業が始まるまで待機していた。

「う……やっぱりこの格好恥ずかしい」

まふゆが恥ずかしそうに呟きながら、シャツを伸ばしてブルマを隠していた。

「ってか、いつも思うんだけどよ。何で今時ブルマなんだよ。この学園は……」

華も自分の格好を見てうんざりする。学長曰く“ワシがいる限り、この学校はブルマじゃ”との事。

鉄心が引退でもしない限り、この学園の女子の体操服は永遠に変わる事はないだろう。

「……………」

サーシャはそんなまふゆの体操服姿をぼーっと眺めていた。そんな

サーシャの視線を感じ取り、まふゆは自分の身体を隠すような仕草を見せる。

「そ、そんなにジロジロ見ないでよ……サーシャ」

「いや、俺は……別に」

照れ隠しをしているのか、サーシャは顔を赤くして視線を逸らす。何度も見ている筈なのに、まふゆのブルマ姿はどうも慣れないサーシャなのだった。

「ア——————イッ!——!」

するとどこから現れたのか、突然ビッグ・ママがサーシャとまふゆの間に割り込んできた（正確には降ってきた）。目を鋭く光らせ、二人を睨み付けている。どうやら惚気は禁止、という事らしい。

サーシャとまふゆは距離を置くと、ビッグ・ママはふんと鼻を鳴らし、集まった生徒達の前へと歩いていく。

「さて……早速授業を始めるとしようか」

ニヤリと笑うビッグ・ママ。生徒達全員が、ゴクリと唾を飲んだ。これから一体何をやらされるのか……そう思うと不安が募る。

「今日の授業は……アタシとの模擬戦闘を行う事にする」

そして、その不安は見事に的中した。生徒達の殆どが恐怖で震え上がる。

「その前にだ……サーシャ、まふゆ、華。お前たちは後だ。まずは川神学園のレベルがどれ程のものか、お手並み拝見といこうじゃないか」

サーシャ達はいつもビッグ・ママの訓練を受けている為、実力は把握している。

「さあ、アタシと戦いたいヤツは前に出るんだよ」

ヨンパチがトラウマを植え付けられ、キャップが捕まり、なおかつ心を負かしたサーシャでさえも震える最強の存在。

そんな人間に、太刀打ちできるわけがない。生徒達は誰も前に出ようとはしなかった。

そんな中、勇敢にも名乗りを上げる生徒が3人。

風間ファミリーのメンバー、ワン子、クリス、京だった。3人はビッグ・ママの前に堂々と出る。

「お前たち、名前は？」

「はい！2 - F、川神一子！」

「同じく、クリステイアーネ＝フリードリヒ！」

「同じく、椎名京」

3人とも力強い（京はそうでもないが）声を上げ、真剣な眼差しでビッグ・ママを見上げる。ビッグ・ママは腕を組み、他に挑戦者がいない事を確認すると、満足げに頷くのだった。

「ふむ、いいだろう。武器は好きな物を使って構わない」

言って、ビッグ・ママは武器のレプリカ（教室から勝手に持ち出した物）を用意する。

ワン子は薙刀を。クリスはレイピアをそれぞれ手にする。京は武器は取らず、素手で勝負に挑む。

武器を選び、戦闘の準備を整えた3人は改めてビッグ・ママと対面した。

「あたしが先に行くわ！」

一番手を先取るワン子。

「いや、自分が先だ」

割り込むクリス。どちらが先に戦うか揉め出し、火花を散らしていた。一方の京はどちらでもいいらしく、言い争う2人を見て“しょーもない”と溜息を吐くのだった。

すると、ビッグ・ママが口火を切って宣言する。

「順番を決める必要はない。3人まとめてかかってくるとい
い」

そのビッグ・マムの言葉に、ワン子達 否、2・Fの全員が驚愕した。

ワン子、クリス、京はクラスの中でも戦闘力の高い強者達だ。その3人を同時に相手をするのだから、ビッグ・マムには相当の自信があるのだろう。

(3人同時……なんか燃えてきたわ！)

ビッグ・マムという強敵を前に、闘争心を燃え上がらせるワン子。

(随分と舐められたものだな……目にものを見せてやろう！)

挑発を受け、クリスはビッグ・マムを睨み付ける。

(ま、めんどくさくなくていいか)

京は相変わらず冷めたままだった。

「さあ、始めようじゃないか」

まずはワン子が先陣を切り、持ち前のスピードでビッグ・マムに接近する。薙刀を振り上げ、その一撃をビッグ・マムに叩き込む。だが、

「遅いつ！！！！！」

ビッグ・マムはあっさりと身を躲す。薙刀を掴み、片手でワン子の身体ごと投げ飛ばし、地面へと叩き付ける。

「あくつ！？」

まるで鈍器で殴られたような重い衝撃がワン子の身体を襲う。ワン子は怯み、しばらく動けなかった。

「はっ

「！」

続いて京の攻撃。京は遠距離専門ではあるものの、体術はある程度体得している。

だが、あくまで“遠距離専門”であり、肉弾戦でビッグ・マムとやり合うには到底及ばない。ビッグ・マムも体術で牽制し、京の腕を掴んで背負い投げる。

「うっ！？」

うまく受け身は取れたものの、反動と衝撃が大きく、京の身体中に痺れが走った。

「もらったっ！！」

さらに、クリスの弾丸のようなレイピアの一撃がビッグ・マムの身体を狙う。ビッグ・マムは舌打ちをすると、紙一重で攻撃を回避した。

「まだまだっ！！！」

クリスの攻撃はさらに続く。常人の動体視力では捉えられない程の高速連続突きを放ち、ビッグ・マムを追い詰める。

だが、マシンガンのような怒涛の攻撃さえも、ビッグ・マムは見事に躲していく。

さすがは戦いのプロ……戦術教官を名乗るだけはあるとクリスは思う。だからこそ、目の前の強敵を打倒したいと、騎士としての血が

騒いだ。

（だが 次で決める！！）

クリスはビッグ・ママが反撃を始めるまでの僅かな瞬間を狙っていた。

1、2、3 連撃のカウントと同時に、腕に力を溜めていくクリス。徐々に距離を縮め、必殺の間合いへと入った。

クリスは身体を捻り、バネのように反動を利用する。そして、

「零距离 刺突！！！！」

渾身の一撃をビッグ・ママの身体目がけて放った。距離は技の如く、零に等しい。避けられる道理などありはしない。

レイピアの一撃はビッグ・ママの腹部にめり込み、致命的なダメージを与える。

「 ！？ 」

そのはず、だった。

クリスは突きของ構えをしたまま動かなかった。否、正確には動けずにいる。

正面にビッグ・マムの姿はない。レイピアを持つ手首はビッグ・マムに掴まれ、クリスは身動きを完全に封じられていた。

「動きのキレ、隙のなさ。なかなかやるじゃないか。太刀筋も悪くない。だが、お前の攻撃は“真っ直ぐ”過ぎる。それじゃあ、相手に攻撃する場所を教えているようなもんさね」

「くっ
！」

レイピアを突き出した僅かな瞬間、ビッグ・マムは攻撃が当たる正確な位置を把握し、攻撃を回避していた。クリスは腕を振り解こうと力を入れるが、まるで石のように硬く、ピクリとも動かない。

「次はこっちの番だ」

腕に力を込め、拳を強く握り締めるビッグ・マム。身体の自由を奪われ、もはやクリスに逃げる術はない。

「ア——————イッ
!!!!!!!!!!!!」

ビッグ・マムは強烈なアッパーをクリスの腹にめり込ませ、身体ごと打ち上げた。クリスの身体が空高く吹き飛んでいく。

「がはっ……………!?!」

まるで大砲のような強力な一撃だった。クリスは立ち上がろうと身体に力を入れるが、予想以上にダメージが大きく、そのまま地面に崩れ落ちて気絶した。

クリス、ダウン。

「クリスがー撃!?!マジかよ……………」

全貌を見ていた岳人が絶句する。クリスの強さを知っているが故に一撃で沈黙したという事実が信じられなかった。他の生徒達も同じである。

「うっつ……………まだやれるわ!」

薙刀を杖代わりにし、ようやく立ち上がるワン子。身体中のあちこちが悲鳴を上げているが、戦いに支障がある程ではない。京も起き上がり、戦線に復帰する。

「ほう。なかなかしぶといじゃないか」

こうでなくては面白くないと、ビッグ・ママは笑う。

「はあああああー！ー！」

反撃を開始するワン子。フルスピードで再び突貫し、空高く飛び上がった。

「川神流奥義・大輪花火！！！」

薙刀を振り上げ、全力を注いで攻撃を叩き込む。

「ふん、隙だらけだ！！」

ビッグ・ママは薙刀の猛攻をフットワークで掻い潜り、攻撃が大振

りになった瞬間を狙ってアッパーカットを放つ。

「京　　！」

そしてワン子の掛け声と共に、その瞬間を京が狙う。

京は手に隠し持っていたパチンコ玉を弾き、ビッグ・マムの身体に向けて狙い撃った。パチンコ玉は見事ビッグ・マムの身体に直撃する。

(当たった！これで……え？)

だが、ビッグ・マムが怯む事はなかった。

「うわああああっ!?!」

ビッグ・マムの攻撃がワン子に直撃する。咄嗟に薙刀で防御したものの、それも虚しく薙刀ごと折られ、攻撃は見事に貫通した。ワン子の身体が勢いよく吹き飛び、地面に叩き付けられる。

(そんな……あり得ない)

確かに、京の攻撃は当たっていた。なのに、まるで効いていない。今の今までこんな状況に出くわした事のなかった京は冷静さを失い、再びパチンコ玉を取り出して応戦する。

「 攻撃の隙を突き、狙撃して怯ませるという考えまではよかったが」

「!?!」

京の背後に、何時の間にかビッグ・マムの姿があった。腕を掴まれ、身動きが取れない。

「相手が悪かったね アミン」

最後の祈りを捧げ、京の首筋に手刀を叩き込んだ。京は“しゅん…”と言つて気を失い、地面に崩れ落ちる。

日頃から鍛えているビッグ・マムの肉体には、パチンコ玉のような小細工は無力であった。

京、ダウン。

クリス、そしてついには京までもがやられ、戦局は絶望的だった。

残るはワン子のみ。ワン子は傷だらけの身体に鞭を打つように、ゆっくりと立ち上がる。

「はあ、はあ……まだまだ」

口では強がっていても、身体は殆ど動かないに等しかった。それでも、ワン子の戦いの意思は消える事はない。

たとえ身体が悲鳴をあげようと壊れようと、ワン子は絶対に諦めなかった。ここで諦めたら、きつと前に進めない。

川神百代。自分の目標とする人間に少しでも近づく為に、ここで倒れる訳にはいかなかった。

「
」

そんなワン子の姿を見て、努力の天才だとビッグ・ママは思う。だが、努力をしても超えられない壁がある。

少なくとも、今の時点では。

「川神一子。お前は」

ビッグ・ママは告げる。ワン子に現実を突き付ける為に。だがその直後、

「その勝負、待った　　！！」

突然、校庭に声が響いた。正確には、ビッグ・ママの頭上からだつた。そして、その声の主は華麗に地面に着地する。

ビッグ・ママの前に現れた、川神学園の生徒が一人。

その正体は……武神、川神百代であった。

6話 激突、武士娘！（後書き）

何と言うビッグ・ママ無双（笑）

まじこいファンのみんな、ごめんなさい。3人ともフルボッコになりました；

そして次は百代との連載です！

7話 最凶と最強(前書き)

ついに百代VSビッグ・マムの戦いです！はい、クエイサー組が殆ど空気が笑)

7話 最凶と最強

1 時限目の授業の時間に乱入し、ビッグ・マムの前に現れた百代。

ビッグ・マムの戦いを教室から眺めていた百代はとうとう闘争本能を抑えきれなくなり、授業を抜け出していた。

2・Fの生徒達も、百代の突然の登場に騒然とする。

「お……お姉さま？」

戦いでボロボロになった身体で、よろよろと百代に歩み寄るワン子。

だが、百代の目にワン子の姿は映っていなかった。百代にはもう、ビッグ・マムしか見ていない。

「ワン子、こいつはお前が勝てるような相手じゃない。下がれ」

「で、でも……」

「姉の言う事が、聞けないのか？」

「う……」

大人しく、百代の言う通り引き下がるワン子。この時の百代の目がまるで獣のように見えて、ワン子は少し恐怖を覚えた。

「ビッグ・マムとか言ったな。私は3・F所属、川神百代だ。今から貴方に決闘を申し込む!!」

ビッグ・マムと対面した百代は早速宣戦布告をする。それに対しビッグ・マムはニヤリと笑う。

「お前が川神百代かい。噂には聞いているよ……いいだろう。その決闘、受けて立とうじゃないか」

何の躊躇いもなく、百代との決闘を承諾するビッグ・マム。ビッグ・マムは2・Fの生徒達に向き直った。

「お前たち、今日の授業は自習だ。各自1時限目の授業が終わるまで、好きにするといい」

何ともむちゃくちゃな講師だと、2・Fの生徒達全員がそう思った。

だが、生徒達の取る行動は一つしかない。

百代とビッグ・マムの対決を、見過ごす訳にはいかなかった。

「うっ……」

「ん……」

ビッグ・マムの一撃を受け、倒れていたクリスと京が意識を取り戻す。大和、キャップ、モロ、岳人が駆け寄り、二人を介抱する。

「クリス、大丈夫？」

モロと岳人がクリスに肩を貸す。クリスは立ち上がると、唇を噛み締めながら、地面を視線に落としていた。

「手も足も出なかった……あの教官、思った以上に強い」

まるで赤子扱いにされたような戦いだった。クリスは自分の未熟さを思い知らされる。

「京、すっかりしろ」

ぐったりした京に肩を貸し、大和が声をかける。京は意識が朦朧と
していて、今にも倒れてしまいそうだった。

「大和……私、もう……」

「どこか痛むのか？なら、保健室に……」

「大和がキス、してくれたら……私、もう何も怖くない」

「よし、分かった。とりあえず保健室に行こう」

「もう、大和のいけず」

半分（殆どが）仮病だった。大和を引き付ける為の。

「ワン子、よく頑張ったな」

キャップがワン子の肩を叩く。ワン子はえへへと笑い、急に力が抜
けて、地面に崩れてしまった。キャップはワン子を背負うと、大和

達のいる方へと歩く。

(お姉さま……)

ワン子は思う。あれは百代の姿をした”何か”だ。自分の本能を満たしてくれる相手を、常に探し求めている。

まるで、戦いに飢えた獣のように。

大和達といつものように遊んで笑っていた百代は、もう帰ってこない……そんな気がして、ワン子は胸が締め付けられるような思いだった。

その一方で、百代はビッグ・ママという強者と対峙し、歓喜していた。

あのワン子、クリス、京ですら手も足も出ないとなれば、相手にとって不足はない。

サーシャといい、あのユーリといい……戦いに震え、鼓動が高鳴る日をどれだけ待ち望んでいたか。百代は武者震いし、闘争心を

燃やしていた。

「久方ぶりの死合いだ……楽しませてもらうぞ、ビッグ・ママ！」

「いい気になるんじゃないよ小娘が。川神百代、お前のその天狗っ鼻をへし折ってやる！」

互いに火花を散らし、鬨気をぶつけ合う百代とビッグ・ママ。もはやこれは決闘というレベルでは収まらないだろうと、ここにいる誰もがそう思った。

百戦錬磨の武神と、ワン子達を軽くあしらう程の圧倒的な戦闘力を見せつけた戦術教官。

今、最凶と最強の戦いが始まるうとしていた。

「この戦い、ワシが立ち会わせてもらうぞい」

二人に向かって歩いてきたのは鉄心だった。鉄心は真剣な表情で両者を見る。

「モモ。授業を抜け出すのは感心せんが、今回だけは特別じゃ」

「やけに聞き分けがいいな、じじい。まあ、止めたとしても無駄だな」

百代は腕を鳴らし、ニヤリと笑いながらビッグ・ママをまじまじと凝視する。今すぐにも戦いたいと言わんばかりに。

すると、学園中から他の生徒達や教師たちも決闘を見たいがためにやってきた。校庭は、あっという間にギャラリィで覆い尽された。

ちなみに授業は中断し、決闘の見学は鉄心の学長権限により許可が降りている。

「では両者、名乗りを上げるがよい！」

「3 - F、川神百代！」

「川神学園特別講師、ビッグ・ママ」

両者とも名乗りを上げ、互いに顔を向き合った。校庭中にあるギャラリィ全員が息を呑む。

(ビッグ・マム殿、モモを頼みましたぞい)

心の中でビッグ・マムに託した鉄心は、決闘開始の合図を告げる。両者は睨み合い、拳を構えて戦闘体制に入る。

この戦い 真剣マツにならなければ勝てない。究極の対決が、今実現されようとしていた。

「いざ尋常に はじめい!!」

鉄心が合図をした次の瞬間、百代とビッグ・マムは同時に動き出して突貫する。

「川神流奥義・無双正拳突き！」

百代は拳を突き出し、強烈な一撃を繰り出した。ビッグ・マムもそれと同時に拳を突き出し、ストレートを打ち込む。

互いの拳と拳がぶつかり合い、その反動で凄まじい衝撃が巻き起こった。地面が揺れ、いかに強力な一撃かを物語っている。

「ふんっ！！」

ビッグ・マムは即座に反撃し、百代の左上腕に回し蹴りを打ち込んだ。百代は回避できず、打撃で骨が軋む。

(早い!?……だがこの程度!)

百代もすかさず反撃し、もう一度正拳突きを放った。ビッグ・マムも避けきれず、腹部に直撃を受ける。

「ぐっ……!？」

ビッグ・マムは後退し、体制を立て直した。腹にダメージを負ったものの、鍛え上げられた鋼の肉体で衝撃はある程度軽減されていた。もしもそれがなければ、一撃で沈黙していただろう。

(あの一撃でこの威力かい。さすがは武神と言った所か)

ビッグ・マムは心の中で感心する。今まで戦ってきた中で、百代は格段に強い。少しでも気を抜けばやられるのは自分だ。

(こいつは……久しぶりに本気を出さないといけないねえ)

それにも関わらず、ビッグ・ママは全力ではなかった。百代の力量を測るため、様子を伺っていた。

だが、もうその必要はない。百代は計り知れない程のスペックを持った化け物だと認識したビッグ・ママは、精神を集中させて再び構える。

その様子を、百代は興味深そうに眺めていた。

(ようやく本気を出したか……なら、こちらも出し惜しみはなしだ)

百代も同じく、ビッグ・ママの力量を測っていた。百代は抑えていた闘気を身体中から放出させ、これまでとは比べ物にならない程のパワーを漲らせている。

「さあ、いくぞー！」

「来い、川神百代！」

戦闘続行。両者が接近し、体術による激しい攻防が始まった。互いに互角の戦いを繰り広げ、リードを譲らない。

その戦闘光景を見ていた多くのギャラリイは、誰も声をあげなかった。人の領域を逸脱したハイレベルな戦いを、ただ口を開けて見入っている。

「すごい……あの姉さんと、互角でやりあうなんて」

大和も思わず魅入ってしまった。

それもそのはず。何故なら今まで百代と戦ってきた相手は、互角どころか決闘以前の問題であり、10秒も立たないうちにやられてしまふのを何度も見てきたからだ。

それが今、百代と対等に渡り合っている人間がここにいる。その光景は新鮮極まりない。

「ははははは！楽しいぞ、貴方のような強者を、待ち望んでいた
！！」

「小娘にしてはやるじゃないか！ここまでアタシが本気になったのは久しぶりだよ」

強さを認め合い、拳と拳で会話を交わす二人。百代もビッグ・ママもこの戦いを心底楽しんでいた。

「だが、そろそろ決めさせてもらうぞ！！川神流奥義・星殺し

」

「やらせないよ！！！」

百代が気を練り上げる僅かな瞬間を狙い、ビッグ・ママは百代の四肢に打撃を打ち込んだ。ダメージを負い、百代は体制を崩すが、身体の細胞を活性化させてダメージをリセットした。

瞬間回復

百代が修行の末に獲得した能力である。

「お返しだ

　　禁じ手・富士砕き！！」

百代が反撃し、強力な正拳尽きがビッグ・ママを襲う。ビッグ・ママも正拳突きで迎撃して攻撃を相殺させた。が、思った以上に衝撃が大きく、反動で身体が大きく後退する。

（身体の細胞を活性化させてダメージを無くした……随分と厄介な能力だね）

未恐ろしい小娘だ、とビッグ・ママは笑う。これではいくら攻撃をしても無意味で、体力を削られて力尽きるのを待つばかりだ。

しかし、その規格外の相手を如何に倒すかこそが、戦術教官の腕の見せ所である。

百代は強い。だからこそビッグ・ママは知りたかった。百代の中にある、戦いの真意が。

「……川神百代。お前に一つ聞きたいことがある。お前は何のために戦う？」

何故戦いに執着するのか、何故強さを求め続けるのか。百代の心を震わせ、突き動かす程の理由があるはずだ。

しかし、その質問に対し、百代は小馬鹿にするように笑う。

「愚問だな……決まってるだろう。戦いたいから、戦うんだ！」

百代の回答は単純明快な物だった。ただ、本能の赴くままに戦う。そこに理由などありはしない。ひたすら強者を求め、倒してはさらに強者を求める……果てのない、歪んだ欲望だった。

それを聞いたビッグ・ママは深く目を閉じて、考えに耽る。鉄心の依頼通り、このままの状態でも百代が戦い続ければ精神が狂い、もはや人間ではなくなってしまうだろう。

それ以前に、ビッグ・ママは哀れに思った。強者の果てにあるのは、孤独しかないというのに。

「嘆かわしいねえ。それがお前の答えか」

「そうだ、その何が悪い？ 私は強い者を求め、打ち倒す。ただそれだけだ。そしてビッグ・ママ、貴方も私が倒す！！」

ビッグ・ママに突進し、正拳突きを放つ百代。しかしビッグ・ママは微動だにせず、ただ静かに目を閉じ、佇んでいた。

何かを企んでいるのか。それとも、勝てないと知り戦意を喪失したのか。どの道、百代に止まる理由などない。

どんな策があるかが、全て打ち砕くのみ。百代に迷いはなかった。

「我が主よ」

「

ビッグ・マムの目が開く。右腕に力を溜め、突進する百代を迎え撃つ。

「愚かなる愛し子に哀れみを」

百代との距離が零になる寸前、正拳突きをしゃがんで回避し、ビッグ・マムは百代の腹部に渾身の一撃を放った。

「じっふ

！？」

ビッグ・マムの拳が深々と百代の腹にめり込み、衝撃で胃液が逆流する。おそらくこれが、ビッグ・マムの全力だろう。それが身体中に伝わってきた。

だが……百代はニヤリと笑っていた。こうなる事を予測していたかのようだ。

(……！？拳が抜けない！？)

百代の腹に減り込んだビッグ・マムの拳は、まるで接着剤か何かで

くっつけたように、ビクともしなかった。百代はビッグ・ママを捕縛するため、この攻撃を意図的に受けたのである。

「これで終わりだ！！」

百代から発する膨大な気のエネルギーが、ビッグ・ママの拳を通して伝わる。エネルギー量は次第に膨れ上がり、百代の身体が異常な熱を帯び始める。そして、

「川神流奥義・人間爆弾

！！」

百代の周囲に大爆発が起こり、ビッグ・ママもろとも巻き込んだ。爆風で砂嵐が巻き起こり、ギャラリーが砂が入らないよう目を腕で隠し、後退っていく。

やがて爆風は収まり、砂埃から二人の影が飛び出してきた。百代とビッグ・ママである。二人は距離を取って着地し、体制を立て直した。

百代は自身を爆発させた事によりダメージを受けたが、瞬間回復により完治している。

一方のビッグ・ママは爆発による傷を負っていたものの、戦闘に支

障はなかった。しかし、その差は歴然。百代は無傷であり、ビッグ・マムが圧倒的に不利なのは明らかだった。

「この攻撃を受けてまだ立っていられるとはな……驚いた」

「見くびるんじゃないよ。あれくらいの爆発じゃ、アタシには響かない」

「ふっ、そうこなくてはな」

何かが満たされていくのを感じる。ビッグ・マムは今まで百代が出会った中で、最強の戦士であろう。ここまで渡り合える人間はそうはいない。

「さあ、戦闘再開と行こう　　ビッグ・マム……」

百代は再び構えた。だが、ビッグ・マムは構えず、腕を組んで百代を見つめていた。その目に闘志は宿っていない。

そして、ビッグ・マムは静かにこう答えた。

「いや　　もう詰みだ」

詰め　　つまり、勝敗は決したという事だろう。その言葉を聞いたギャラリーがざわめき始める。

それは、ビッグ・ママが負けを認めたと解釈すべきだろうか。状況からすれば、そうとしか考えられないだろう。当然百代は納得するはずがなく、ビッグ・ママに問う。

「……それはどういう意味だ？」

「自分の身体によく聞いてみるといい」

「身体……？　一体何を言ってる？　うぐっ！？」

突然、百代は自分の腹を抑え込み、地面に崩れ落ちて膝をつく。身体中から汗を噴き出し、千切れそうなくらい強烈な痛みが百代を襲った。

百代はあまりの痛みに耐えきれず、とうとう地面に倒れて蹲くまっってしまう。

そして身体からみるみる傷口が開き始めていた。一体何が起きたの

か、百代は理解できずにいる。

百代が地に伏している……ギャラリーや大和たちは目の前で起きている事が信じられず、ただ呆然と見ている事しかできなかつた。

「く……あ、どうなって……」

「決まってるだろう。お前は文字通り“自爆”したのさ」

ビッグ・ママは眈々と告げる。

「じ、ばくだと？……でも、私は」

人間爆弾を使用した際、瞬間回復で傷は完治したはずだった。自爆など、断じてあり得るはずがない。もしあるとするなら、瞬間回復が使えなくなつたとしか考えられない。

だが、それこそあり得ない。瞬間回復を潰せる術など、ましてや初見の相手ができる技ではないのだから。

「何を、した……」

「お前の考えている通りだ。瞬間回復を潰したんだよ」

百代の考えている事を見透かすように、ビッグ・ママは答えた。

「なんだ、と……どうやって」

「お前の体内に流れる気のエネルギーの起点に、直接^{けい}勁を打ち込んだのさ。これですばらく瞬間回復は使えまい」

勁とは、中国武術における力の発し方の技術である。主に発勁と呼ばれ、ビッグ・ママはそれを応用した形で百代の起点に打ち込み、気の流れを一時的に止め、瞬間回復を封じたのだ。

百代が突進し、ビッグ・ママの攻撃を受けたあの瞬間である。

たった一度手を合わせただけで、ビッグ・ママは戦いの最中で百代の身体に流れる気を察知し、起点を見つけたしていた。

「瞬間回復に頼りすぎたね……それがお前の敗因だ」

純粹な力という面では、ビッグ・ママは百代より下回るだろう。し

かし、知略と戦術はビッグ・ママが遙かに上回っていた。

「負ける、だと……この私が」

敗北という文字が、百代の心を苛立たせる。それは武神としてのプライドが許せなかった。百代は傷でボロボロになった身体を無理やり起こし、立ち上がる。

「ほう。その身体でまだ戦うつもりかい？」

「あ……たりまえだ。まだ、私は戦え……うぐっ!？」

身体に痛みが走り、再び地面に崩れ落ちる百代。四肢が悲鳴を上げ、もはや動かす事すらままならなくなっていた。

「人間の身体の傷は、普通は完治までに時間がかかるものだ。瞬間回復がない今、お前の身体は人並みだ。当然、他の傷口も開くつてもんさね」

アタシがなんの考えもなしに攻撃をしていたと思っていたのかと、ビッグ・ママは悟る。百代との戦闘でも常に先を読み、こうなる事を予測して四肢に攻撃を入れていた。

百代は瞬間回復という絶対の能力を持つが故に、それが同時に弱点でもある事を思い知らされた。完全に、ビッグ・マムの手中であることに気づけなかった。

「……モモ、もう決着はついた。お前の負けじゃ」

戦いを見ていた鉄心が、百代に諭す。瞬間回復が封じられている今、これ以上誰がみても戦えるような身体ではない。

「まだだ……」

「何？」

「まだだ、じじい!!」

敗北を認められない百代は立ち上がり、残っている気力を練り上げる。身体が傷だらけになっても戦いを望む百代の姿は、痛々しかった。

そこまで突き動かしているのは、やはり本能なのか。それとも……ビッグ・マムはもう一度問う。

「もう一度聞こう。お前は何のために戦う？」

「……何度も同じ事を言わせるな！戦いたいから、戦う、ただそれだけだ！」

百代は叫び、残る力を振り絞ってビッグ・ママに攻撃を仕掛ける。だが、最初の時よりも勢いはない。スピードも格段に落ちている。言うならば、単なる悪足掻きだった。

ビッグ・ママは難なく攻撃を避け、カウンターで蹴りを百代の身体に打ち込む。

「あ………がっ!？」

吹き飛ばされ、地面を転がっていく百代。だが、それでも立ち上がろうとするそれは、もはや修羅であった。

「はっきり言わせてもらおう。川神百代、お前は武神失格だ」

「なん………だと？」

地面に這いつくばるようにしながら、百代はビッグ・ママを睨み付ける。

「戦いたいから戦うだつて？笑わせるんじゃないよ小娘が。それもはや狂気でしかない。そんなものは理由がないのと同じだ。お前は戦う時点で、既に心が負けているんだよ」

力と精神は、常に等しくなければならない。どちらかが欠ければバランスが崩れ、綻びが生まれてしまう。戦いに執着し、自分の心を制御しきれない百代はまさしくそれだった。

「心が……負けている……」

打ちひしがれ、地面に視線を落とす百代。百代の瞳から、次第に戦意が失われていく。自分の色が、敗北の色に染まるのが分かる。

ああ、自分は負けたのだとはつきりと理解した。悔しさで叫んでしまいたかった。認めたくはない、しかしそれが現実であった。

百代が戦意喪失したと認識した鉄心はゆっくりと右腕を上げ、勝者の名を高らかに宣言する。

「勝者　　ビッグ・ママ！」

戦いに勝ったのは、ビッグ・ママであった。しかし校庭で見物していたギャラリーに歓声はなく、あるのはただ静寂のみ。

勝利するのは百代であろう……誰もがそう思っていたが、結果は予想だにしないものだった。

ビッグ・ママは百代に背を向けて立ち去っていく。去り際に、鉄心がビッグ・ママの元に歩み寄った。

「……世話をかけましたな、ビッグ・ママ殿」

「随分と手間がかかってしまいましたかね。あの子が戦う意味を見つけれない限り、立ち直る事はないでしょう」

後は、百代次第ですとビッグ・ママ。ちょうど一時限目の授業が終わるチャイムがなる頃合いになり、ビッグ・ママは2・Fの生徒達に教室に戻るよう号令をかける。

そんな中、大和たち風間ファミリーは傷ついて倒れた百代に駆け寄っていた。

「姉さん！」

「お姉さま!!！」

大和やワン子たちが心配して声をかけるも、今の百代には届かない。

百代は、これまでにない敗北を味わっていた。

“自分”という名の、敗北に。

「くそ……負けた。私は……私は……くそ、くそおおおおおお
おおおおおお!!！」

校庭中に、百代の悲痛な叫びが響き渡っていた。

7話 最凶と最強（後書き）

百代ファンの皆様、ごめんなさい。こういう結末にしちゃいました。ここからは百代の葛藤と成長を描いていきます。

そしてその後は、ようやくアデプト勢力と謎の元素回路が関わってきます。ご覧になっている方々、ぜひぜひご期待下さい！

ちなみにそれまではサーシャ達の出番が……orz

8話 失ったもの

川神百代が敗北した……その噂は、学園中に知れ渡った。

ビッグ・ママとの決闘後、百代は救護班に運ばれた。現在は保健室で眠り、傷が癒えるのを静かに待っている。

勁を打ち込まれ、封じられた瞬間回復も徐々に機能し始め、戦いの傷跡も完治しつつあった。

ただ、心に受けた傷跡は未だに消える事なく、今も百代を戒め続けている。

『お前は戦う時点で、既に心が負けているんだよ』

ビッグ・ママに言われたあの言葉が、百代の頭の中で繰り返し再生される。心の弱さ……百代は薄々とは気づいていた。

だが、こうして向き合わなければならぬ日が来ようとは思わず、どうしたらいいか答えを出せずにいるのだった。

(戦いの……理由……)

今まで考えた事もなかった自分が戦う“意味”を、天井を仰ぎながら自分自身に問う。当然、答えは返ってこなかった。

戦いたいから戦う。ただ本能のままに戦い続けてきた百代。それは理由にならないと否定され、始めて自分の戦いの在り方を再認識する。

やはり、それでも答えは出ない。考える度に、まるで出口のない迷路に迷い込んだように、百代の思考は深い溝へと落ちていくのだった。

「目、覚めたみたいだね」

ベッドの周囲を覆っていたカーテンが開き、女性　　この保険医
であろう人物が顔を出す。

「貴方は……？」

「アタシは及川麗（いづみ）。聖ミハイロフ学園から臨時で赴任した保険医だ。
よろしく」

グラマーな身体に、私服の上に白衣を着込んだ女性の名前は、及川麗。聖ミハイロフ学園の保険医で、川神院で出会ったユーリと同様、サーシャ達の保護者的存在である。

「私は、いつからここ？」

「ざっと3時間ってとこ。それにしても随分と怪我の回復が早いじゃない。若いっていいわね」

そう言つて、麗は部屋の窓を開ける。ポケットからライターとタバコを取り出し、外を眺めながら喫煙を始めた。

「あ」

百代はふと、ベッドの横に飾つてある花に視線がいく。花だけではない、お菓子や手紙が沢山置かれている。

「あんたが寝てる間に、ファンの子達が来て置いていったよ」

モテモテだね、と麗は笑う。百代を心配したファンの生徒達がお見舞いに来てくれていた。

純粹に嬉しいと感じた百代だったが、今の心境ではあまり喜べなかった。喜べないというよりは、どこか虚ろで、何も感じないという方が正しい。

……しばらくして、保健室の扉が開く音が聞こえ、生徒達数人が入ってきた。

「お、本命が来たか」

麗はタバコをやめて、彼らを出迎える。

やってきたのは大和、キャップ、モロに岳人。ワン子、京。そしてクリスとまゆっち。

いつもの風間ファミリーのメンツだった。

「姉さん、具合はどう？それと、これ差し入れ」

大和はお土産の入った袋を百代に渡す。中に入っていたのは、百代の好物の桃だった。

「ふ……さすが私の舎弟だ。気が利いてるな」

嬉しそうに受け取って笑う百代だったが、どこか活力を感じなかった。

まるで何かが抜けてしまったように、百代としての存在感が欠けているように感じる。

「凄かったよ、モモ先輩。あんな戦い始めて見たよ」

モロは負けた事はあえて言わず、当たり障りのない話題を振る。しかし百代は気を遣われていると察したのか、思わず苦笑いした。

「わざわざ気遣う必要はないぞモロ。私は負けたんだ、はつきりとその言ってくれたほうがいい」

「あ、いや。僕は……」

口籠ってしまい、狼狽えてしまうモロ。気まずい空気が流れ始める。すると、ここぞと言わんばかりにキャップがフォローを入れた。

「モモ先輩らしくないぜ？一回や二回負けたくらいで、そんなくよくよすんなって」

「……そうか。そうだったな……」

素っ気のない返事で返す百代。キャップなりに励ましてくれているのだろう。百代は気持ちは嬉しく思ったが、だが、それでも気持ちは晴れない。

負けた事に関してはあまり気にはしていなかった。ただ、ビッグ・マムに言われた言葉がどうしても心にしこりを残している。

「モモ先輩。ど、どうか気を落とさずに……」

『そうだー、まだまだ人生これからだぜー』

まゆっちと松風も元気を出すように声をかけてくれている。クリスやガクト、京も気持ちは同じだった。

しかし、今の百代には耳から耳へと抜けていくだけ。どんな励ましの言葉も響かない。

「た、確かに負けたけど、それでもお姉さまはすごいわ！アタシなんか手も足も出なかったし……」

ワン子は百代を賞賛するが、その顔には影が射していた。やはり、百代が負けてしまった事がショックなのだろう。

自分の目指すべき人が敗れてしまった……それでもワン子は姉であり、目標である百代が好きだった。その気持ち、痛いほど大和達に伝わる。

「はっはっは、ワン子は可愛いな。さすが自慢の妹だ」

そう言って百代は窓の外を眺め始める。そんな百代の表情には覇気がなく、例えるなら魂の抜けた人形のように、虚無に沈んでいた。

「なあ……みんな」

ぼそつと百代が大和達に呟く。視線を向けず、窓の外をひたすら眺めながら。

「私は今まで……なんのために戦っていたんだろうな」

その百代らしからぬ台詞に、大和達は言葉を失った。何て答えればいいのか……もう返す言葉もない。

すると、大和達の様子が気になった麗が顔を出す。

「もう少しで授業の時間だ。お前たちもそろそろ教室に戻れ」

次の授業の時間まで後数分。大和達は仕方なく保健室を後にすることにした。

「じゃあ姉さん……また来るから」

大和達は百代に手を振ると、それぞれの教室へ戻っていく。百代はその後ろ姿を、声もかけずに見送っている。

「……さて、百代ちゃんはこれからどうする？身体の方はだいぶ良くなったし、授業には出れると思うけど、まだここにいます？」

再び喫煙を始め、麗は壁に寄りかかりながら百代に尋ねる。

次の授業はなんだったかと、思考を巡らせる百代。しかし、こんな気持ちでは授業に身が入らないだろう。状態はどうあれ、どの道勉強する気が起きないのは変わらない。

「もう少し、休みます」

「そう、分かった。ま、気の済むまでココにいなさい」

そう言って麗はカーテンを閉めると、自分の机へと戻っていった。

(……………)

身体を倒し、天井を見上げる百代。自分の中の答えを探すように、ただ天井を眺めている。

未だに心は晴れない。百代はしばらく、自分に問い続けていた。

自分が戦い続ける本当の理由、そしてその意味を。

8話 失ったもの（後書き）

少し短いですが、8話終了です。そして、クエイサーキャラの及川麗が初登場しました。

しばらくサブエピソードがないので、9話連続で続けたいと思います。

9話 葛藤

百代とビッグ・ママとの決闘から数日後。

大和達（キャップとワン子を除いて）風間ファミリー一行は、多馬川が緩やかに流れる土手を歩きながら、学園へと向かっていた。

ちなみにキャップは朝から急に京都へ行くと言い出して、そのまま外出。

ワン子は早朝から走り込みのため、多馬大橋の辺りで合流するとの事である。

「はあ……昨日もまたつられちゃったぜ」

「ガクトも懲りないよね……」

前日に駅でナンパに失敗し、肩を落としながら歩くガクト。モロはその隣で苦笑いしている。

「今日こそカーチャさんに話しかけて、お友達になります！」

『頑張れまゆっち。お前ならできる』

「っていつか、転校してきてから随分経ってるよね」

「京。それは言わないでおう」

今日の意気込みを胸に、松風と会話をして歩くまゆっち。そんなまゆっちを、京とクリスは遠目で見守るのだった。

一方、大和と百代はというと。

「キャップ、今度は京都だったさ。姉さんはお土産何がいい？今のうちに決めてメールしておくよ」

京都に出かけたキャップにお土産を頼もうと、携帯をいじってメールを送る準備をする大和。

「
」

百代は聞こえていないのか、反応がない。ただぼーっと空を眺めて、見ての通り上の空であった。意識が完全にどこかへ飛んでしまっ

いる。

「姉さん、聞いてる？」

大和は声を少し張り上げ、百代に呼びかけた。すると百代はよつやく気づき、大和の方へ視線を戻す。

「……ああ。すまん、大和。えっと……なんだっけか」

「だからさ、キャップの京都土産、何がいい？」

もう一度大和は説明をする。百代なら“舞妓さんのねーちゃんを土産にもつてこい！”と無謀な注文をするに違いない。しかも冗談ではなく本気で。

しかし、返ってきた百代の返答は素っ気ないものだった。

「……特にないな。別に何でもいい」

「あ……そう」

大和は頷くことしかできなかった。会話が途切れて、気まずい空気が流れる。いくらコミュニケーションの高い大和でも、流石に百代がこの調子ではとても絡み辛かった。

しばらく歩いていると、多くの女子生徒達が百代に向かって走ってきた。百代のファンの生徒達である。

「モモ先輩！今日は私を、お姫様だっこしてください！」

「ダメよ、今日は私なんだから！」

「いやいや、今日こそ私が！」

寄ってばかり、百代に要求をせまる女子生徒達。

百代は気に入った女子を抱き上げてはファンを増やし、男子が羨望（特にガクト）するようなシチュエーションを吟味するという……これもいつもの日常風景だ。

だが百代の表情は無気力で、あまり気乗りするようには見えなかった。

「……悪いな、また今度にしてくれ。今はそんな気分じゃないんだ」
言って、百代は前へと歩き出した。女子生徒達が道を開けて、悲しそうに視線を向けながら、百代の後ろ姿を見送っていた。

そんな百代の様子を、大和達も心配していた。ビッグ・ママと戦ってからずっとあの調子で、何をするにも無気力になっている。

(どうしちゃったんだよ、姉さん……)

やはり、ビッグ・ママに負けてしまった事が相当答えているのだろうか……と大和は思う。

無敗の記録が破られ、ついに完敗してしまった百代。だが、それなら百代は自分を負かした強敵が現れたと喜び、今まで以上に闘争心を燃やすはずだ。

それなのに、今の百代にはそれが無い。武神としての魂が消えてしまっている。どうしてそうなってしまったのか……大和達には理由が未だに分からずにいた。

多馬大橋に差し掛かり、大和達はワン子と合流する。ワン子はタイヤの付いたロープを身体に巻き付け、それを引きずりながら走ってきた。

「はあ、はあ……みんな、おはよー！」

だいぶ走ってきたのだろう、身体中汗だらけだった。が、それでも疲れている様子がないのはワン子が元気な証拠である。

「相変わらず元気だよなー、ワン子は」

ガクトもワン子の活力には感心せずにはいられない。ワン子はえっへんと胸を張り、鼻息を鳴らす。

「これくらい余裕だわ！どんどん鍛えて、お姉さまみたいに強くなるの。ね、お姉さま！」

百代に声をかけるワン子だったが、百代は心ここにあらずと言った感じで、ワン子が声をかけられたのことに気づいたのは数秒経ってからだった。

「ん……おお、そうか。頑張れよ、ワン子」

百代の気のない返事が返ってきて、ワン子も調子が狂っていた。いつもなら頭を撫でて褒めてくれるのだが、百代は何もせず、ただ力なく笑うだけだった。

大和達も百代の調子にすっかりお手上げ状態で、何を言ってもこんな感じだという。

（お姉さま……）

虚ろで、まるでガラスのような魂の宿らない百代の瞳。ワン子の目にはそう見えていた。

「
」

百代は再び空を仰いだ。この空のどこかにある、答えを探し求めるように。

百代の心にある迷いは、未だ消えずにいる。

授業の内容も頭に入らないまま（元々する気はないが）時間が過ぎ

去り、気が付けば下校の時間になっていた。

特にする事もない百代は一足先に川神院へと戻り、自分の部屋へと続く廊下を歩く。すると、

「まだ迷っているのか？」

背後から突然声を掛けられる。振り返ると、そこにはサーシャの姿があった。サーシャは腕を組み、壁に寄りかかっている。

「迷ってる……か。きっと、そうなのかもな」

「……………そうか」

サーシャはそれ以上何も言わなかった。百代は用がないと分かると、再び自分の部屋へと歩き出す。

が、ふと足を止め、百代は再び振り返った。

「……………なあ、サーシャ。聞きたい事がある」

「なんだ？」

「お前は……何のために戦う？」

もしかしたら、自分の探し求める答えのヒントになるかもしれない。だから、百代はサーシャに聞き出そうとしていた。戦う理由を。

するとサーシャはその翠色の瞳で、百代を睨み付けた。

「俺に聞いてもお前の探している答えは見つからない。知りたければ、自分で探せ」

サーシャの返答は、とても厳しいものだった。完全に見透かされている……だが道理である。他人に聞いたところで、理由は人それぞれだ。当然答えを得る事はできない。

「そう、だよな……悪い、変な事を聞いた」

「……………」

サーシャは無言のまま百代に背を向けて歩きですが、途中で足を止めて百代に振り返った。

「百代。お前の心は、震えているか？」

「え……………？」

「お前の心が震えたなら……………その答えは見つかるだろう」

意味深な言葉を残し、サーシャは遠ざかっていく。

（私の、心…………）

自分の胸に手を当てる百代。自分の心臓の鼓動が、手を通して伝わってくる。だが、それ以外は何も感じ取れない。

何もかもが、空っぽに思えた。

「はは……………震えてないな、全然」

百代は思わず自嘲する。魂の鼓動が、戦いの本能が、何もかもが失われているように感じる。

もうこれ以上何を求めても無駄という事なのか。それともまだ希望はあるのだろうか。

(それなら、答えは……)

今導き出せる答えは、一つしかない。百代は心の中で決意した。自らのけじめをつけるために。

そして、新たな自分として生まれ変わるために。

9話 葛藤（後書き）

区切りがいいので、また短い話になってしまいました。読んでくださっている方も、これくらいがちょうどいいのでしょうか……。

サブエピソード9「ワンスとビッグ・ママ」

夕日が登り始め、空が茜色に染まる下校の時間。

生徒達が帰宅し、校門を出てそれぞれの家へと帰っていく。

その中には百代の姿もあった。一人で帰り歩く百代の後ろ姿は、どこか寂しげだった。

そんな百代を、学園の屋上から見下ろしている人物が一人。

臨時講師 ビッグ・ママだった。

「さて、どうしたもんかね」

独り言のように、ビッグ・ママは呟く。

百代と対決してからもう数日が経つ。あの日以来、百代の様子を観察していたビッグ・ママだったが、依然と百代に変化はなく、無気力というより諦めに近いものを感じる。

やはり、答えはまだ見つけられていないようだった。

「……………」

腕を組み、目を閉じて考えに耽る。このまま百代が何も変わらなければそれまで……と、鉄心には宣告している。

手助けをするつもりはない。これは百代自身が乗り越えなければ意味がないのだから。

(もう少し、様子を見るか)

変わって欲しいと思う気持ちは、ビッグ・ママも同じ思いだった。

彼女には、気持ちの整理をするしばしの時間が必要なかもしれない。ビッグ・ママは大きく空気を吸い込み、そして静かに息を吐くのだった。

「そこにいるのはわかっている」

屋上の入り口に背を向けたまま、ビッグ・ママは声を上げる。まるで、後ろに誰かいると知っているかのように。

「隠れているつもりだろうが、アタシにはバレバレだよ。さっさと出てきな……川神一子」

「……………」

屋上の扉がゆっくりと開く。現れたのは気まずそうな表情を浮かべたワン子だった。

ワン子はビッグ・ママに近づくと、早速話を切り出す。

「ビッグ・ママ講師。相談があります」

ワン子の目は真剣であった。ビッグ・ママはすぐに、百代の事についてであると理解する。

「川神百代のことだろうか？」

振り返る事なく答えるビッグ・ママ。ワン子は頷いて、今の百代の様子について話し始めた。

「はい。講師と決闘してから、ずっとあの調子なんです。なんていうか、いつも何かを求めているみたいで……だから、アタシに何かできる事があれば」

「ほう。それで、アタシのところ相談に来たってわけかい」

ようやくビッグ・ママはワン子の方へと振り返る。だがその表情は厳しく、ワン子を射抜くように視線を向ける。

「ダメだ。手を出す事は許さない」

「え……ど、どうして!？」

「これはあの子の問題だ。あの子が一人で乗り越えなければ、成長にならないからだよ」

ビッグ・ママの厳しい言葉に、そんな……と小さく声を漏らすワン子。

しかし、自分の大切な姉であり、目標である百代のためだ……ここで引き下がる訳にはいかない。ワン子はビッグ・ママに食い下がった。

「アタシは、それでもお姉さまの力になりたい」

「お前の姉を思う気持ちは分かる。だがね、そっとしておくのも一つの思いやりだよ。分かるね？」

時にはそっと見守る事も大切だとワン子に諭した。しかし、ワン子は納得のいかないような表情でビッグ・ママを見つめている。

「ふむ……………」

ビッグ・ママは腕を組み、ワン子をしばらく凝視する。すると突然右手を伸ばし、ワン子の右胸を鷲掴みにした。

「ひゃうっ！？」

いきなり胸を揉まれ、思わず身体をビクッと震わせるワン子。ビッグ・ママは、じつくりと揉みほぐしてはうんうんと頷いて、何かを感じ取っているようだった。

散々揉み倒し、満足げに頷いたビッグ・ママはようやく手を離す。ワン子は突然の出来事にあわわわと声を上げ、ぶるぶると胸を隠すようにして震えている。

「なるほどねえ……そういうことか」

ワン子の胸を触った手を見ながら、ビッグ・ママはワン子の中にある本質を見抜いていた。

ビッグ・ママの異名である、“地獄の乳揉み師”……そう呼ばれるだけあって、女性の本質が分かるその腕は本物である。

「お前は本当に姉思いのいい妹だ、感心するよ」

ビッグ・ママはワン子を賞賛した。しかし次の言葉に、ワン子は驚愕する事になる。

「だが、あの子を心配しているその裏で、自分の目標が失われる事を恐れている………違うかい？」

「！」

薄々と感じていた本心を……認めたくなかった自分の本質を見抜かれてしまい、ワン子は声も出せなかった。

百代は自分の目標である。ここで百代が答えを見つけられないまま“終わって”しまえば、自分の目指すべき目標が失われる……それがワン子にとって、何よりも恐怖だった。

「あ、アタシは……」

何も言い返せず、拳を握りしめ、地面に視線を落とすワン子。

その瞳には、本心に気付かされてしまった恐怖と悔しさで震え、今にも泣き出してしまいそうだった。

ビッグ・ママはそんなワン子の様子に同情する事なく、さらに残酷な一言を口にする。

「川神一子。はっきりと言わせてもらおうよ、お前には武術の才能は……殆ど皆無だ」

初めてワン子達と手を合わせたあの時に、ビッグ・ママは感じていた。

彼女は努力の天才ではあるが、百代や鉄心のような並外れた武術の才能は殆どない。

それを諭す事で、百代に対する思いがどれ程のものか、見極めようとしていた。ビッグ・ママはさらに続ける。

「お前が目標にしているものは、水に写った月を掴み取るようなものだ。少なくとも、アタシから見ればお前の今持つ才能が開花する可能性は、ほぼゼロに等しい」

ワン子が目指す目標　　いくら努力をしても、届かない領域がある。百代に執着して助けになっただとしても、いずれはワン子が傷つくだけである。

「それでもお前は……お前の目標である川神百代の力になると言い切れるのかい？」

ビッグ・ママは問う。ワン子が失う事を恐れる、川神百代という目標を。届かないと分かっているにもなお力になるか……その覚悟を。

だが、ワン子に迷いなどなかった。たとえ力になれなかったとしても、その目標が叶わぬ夢だとしても。そしてその結果、自分が傷つく事になるうとも。

ワン子の答えは、一つだった。

「アタシはそれでも……お姉さまを助けてあげたい！」

ワン子は再びビッグ・ママを見る。真剣で、覚悟のあるその眼差しは本物であった。

(ふっ……この子は)

ビッグ・ママは心の中で微笑む。ワン子の気持ちを揺さぶったつもりだったが、最初から答えは決まっていたらしい。それなら、わざわざ自分の所へ来る必要はないだろうに。

もしかしたら、ワン子も百代と同じように、確かな“答え”が欲しかったのかもしれない。

「そうか。お前がそこまで言うなら、好きなようにするといい。アタシは止めないよ」

背を向け、さっさと百代の所へ行きなとビッグ・ママ。その言葉に、ワン子は思わず涙した。

「はい……ありがとうございましたー」

流した涙を拭い去り、深く礼をすると、ワン子は屋上の扉に向かって走り出した。その様子を、ビッグ・ママはただ静かに見送っている。

(川神百代……いい義妹を持ったじゃないか)

ここまで思ってくれている人間がいる……幸せ者だと、ビッグ・ママは思った。きっと、彼女なら百代を変えてくれるきっかけになるかもしれない。

(しかし、妙だねえ……)

本人には言わなかったが、ワン子の胸を揉んだ時、ビッグ・ママはほんの僅かに妙な違和感を感じ取っていた。

ワン子の中に表現できないような、ただならぬ“何か”を。

サブエピソード9「ワソ子とビッグ・ママ」(後書き)

久々のサブエピソードです。時間軸は9話の中間くらいですね。更新速度はまちまちですが、頑張つて執筆致します。

つてか、カーチャ様がマジで空気だ……orz

10話 百代の決意（前編）

大和達の住む、川神市の一角。

多馬川の付近にある廃ビルの中に、風間ファミリーの秘密基地はある。

場所は5階。中は綺麗に掃除され、私物を持ち込んで、もはや一つの部屋と化していた。

大和達はこの基地を使い、毎週金曜日に”集会”を行っている。

大和、モロ、ガクト、ワン子にまゆっち、京と百代はいつものように集まり、お菓子やジュースを飲みながら他愛の無い雑談に花を咲かせていた。

リーダーであるキャップはまだ京都から帰ってきておらず、未だに連絡はない。時間を忘れ、京都を満喫しているのだろう。

「うう……今日もカーチャさんに話しかけられませんでした」

『挫げんな、まゆっち。まだ明日がある』

ソファに座り、がっくりと肩を落としているのはまゆっち。そしてそれを慰める松風。

今日もカーチャと友達になるため話しかけようと勇気を以って挑んだが、その寸前で親衛隊に割り込まれて失敗。結局友達どころか、話しかけることすらできていない。

「運が悪いというか、不器用というか……しょーもない。ちなみに明日は学校休みだから」

京もほとんど呆れている様子。しかしちゃんと突っ込みを入れていた。

「今度の日曜日、まふゆたちが寮に来てくれるそうさ。ああ、日曜が待ち遠しい！」

クリスは嬉しそうに顔を綻ばせていた。いつかまふゆと手合わせをする……その日程が決まり、サーシャ、華と共に島津寮へやってくるらしい。

ついでに言うと、マルギツテも付き添いでクリスの側にいるのだとか。

「慌ただしい日曜になりそうだな……」

折角の日曜だから、飼っているヤドカリを観察しながらまったり過ごそう……そう考えていた大和だったが、早速その予定はなくなってしまうのだった。

モロはガクトのナンパ失敗談をうんうんと頷きながら聞いている。皆それぞれ会話を楽しんでいる。

「
」

一方の百代はその光景を眺めながら、いつ話題を切り出そうかを考えていた。

ビッグ・ママとの戦いで自分が導き出した、一つの答え。考えて、考え抜いて、辿り着いた百代の答え。

それが正しいかどうかは正直言って分からない。ただ、自分のけじめをつけるには十分な回答であると理解していた。

きっとみんな分かってくれるだろう……百代の表情は、以前より晴

れやかではあった。

その隣で、ワン子は百代の様子を暖かく見守っている。

（お姉さま……答え、見つけたんだね）

今まで活力のない百代を見るのは、正直辛かった。それでもワン子は百代に付き添い、稽古や組み手をして、少しでも力になれるように勤め続けていた。

それが実ったのか、それとも百代自身が乗り越えたのか。どんな結果であれ、ワン子にとっては喜ばしい事であった。

（ よし ）

しばらくして、百代はゆっくりと立ち上がる。自分の導き出した決意を大和達に伝えるために。

「……みんな、聞いてくれ」

百代の一声に、大和達が反応して百代を一斉に見る。百代はひと呼吸おいてから話し始めた。

「ビッグ・ママとの決闘から、ずっと色々考えていた。私の何が
けなかったのか、私の……何が足りなかったのか」

百代の話を、大和達は静かに聞いている。自分の答えを待つてくれ
ている、百代は嬉しく思った。

「それをふまえて……私は自分にけじめをつけようと思う。私は
」

百代はすつと静かに息を吸い、自分の決意を大和達に告げる。

「戦いを……武神を、引退しようと思う」

それが、百代の出した答えであった。

百代は考えた末に、自分の中で結論を出す事ができなかったのだ。

戦う意味がなければ、戦えない。戦う理由がなければ、拳は震えな
い。戦いそのものに意味を出さずに戦い続けていた自分に対する罰
であると、百代は自粛するという選択を選んだ。

当然迷いはある。だが、今の自分にはこれしかない。

大和達は百代の決意に驚きを隠せず、それに対する返事すら出せずにいた。勿論、側にいたワン子も笑顔が消えている。

全員、百代の答えに納得がいくはずもなかった。

「やめるって……………どういうこと、お姉さま？」

今までやってきた自分の行為が裏切られたようで、ワン子は動揺していた。そんなワン子に対し、百代は悲しみの入り混じった笑顔でワン子の頭を優しく撫でる。

「ごめんな、ワン子。私を元気付けようとしてくれたのは、すごく嬉しかった。でも……………もう決めた事なんだ」

今更答えは変えられないと、百代は諭す。ワン子はショックのあまり、声も出せなかった。ただ悲しそうに目を見開いている。

「ちょっと待ってくれよ、姉さん！」

次に声を張り上げるように出したのは大和だった。百代の決意に納得がいかず、怒りを露わにしながら百代に反論する。

「戦いをやめるって……やっぱり、ビッグ・ママ講師に負けたからか!? 一度負けたくらいで

「違うんだ、大和。負けたとか……そういうのじゃないんだ。私には
戦う理由が、見つからなかったんだ」

分かってくれ、と百代はまた悲しそうに笑う。大和はそんな百代の態度に苛立ちを感じ始めた。

「だから戦いをやめるってのかよ!? そんなのおかしいだろ!？」

大和はバンツとテーブルに手を叩きつけ、百代を責め立てる。すると、黙っていたモロやガクトも反論を始めた。

「大和の言う通りだぜ。モモ先輩らしくもねえ」

「そつだよ。考え直す事はできないの!？」

モロとガクトの説得も虚しく、百代は首を横に振るだけだった。

「自分も納得がいけない！詳しく説明してくれ、モモ先輩」

「私もそう思う。いくらなんでも安易すぎるよ」

「わ、私もです。何があったかは知りませんが、どうか考え直してください」

クリス、京、まゆっちも百代の説得を試みた。

きっと分かってくれと……そう思っていた百代の表情も次第に影が差し、受け入れてくれない悲しみが怒りに変わる。

「何が……分かる」

怒りでわなわなと身体を震わせながら、百代は大和達全員を睨み付けた。

「お前たちに……私の何が分かる！！！！？」

怒号のような百代の叫びが、部屋全体に静寂を呼ぶ。

百代の苦しみは、百代にしか分からない。大和達は何も言い返せず、ただ黙っている事しかできずにいる。こんな百代を見たのは……初めてだった。

気まずい空気が漂う。怒鳴り散らした百代は我に返り、表情が悲しみに消えていく。

「……すまない、怒鳴るつもりはなかった。外で頭を冷やしてくる」

冷静になり、謝罪した百代は屋上へ行こうと部屋を後にする。それは頭を冷やすという名目の、逃避だった。今は自分はいない方がいい、空気が淀んでしまうと判断し、立ち去っていく。

「待って、お姉さま！」

と、百代に立ちはだかったのはワン子だった。ワン子は真剣な眼差しで百代を見る。

「お願い、考え直して！アタシ、アタシ……何でもするから！」

涙を流し、百代を説得しようとするワン子。

目標が消えてしまうという恐怖と、自分の知っている百代がいなくなってしまうという恐怖が入り乱れ、ワン子の思考がぐちゃぐちゃになる。

それでも、ワン子は百代が好きだから……どうしても諦められなかった。

「本当にごめんなワン子。出来の悪い姉を　許してくれ」

百代はそう言って、ワン子を横切ろうとする。ワン子は何も言うてはこなかった。さすがに諦めたのか……本当に悪い事をしたと、百代は自分を責め立てる。

それでも、自分が選んだ道を引き返す事はできない。これは自分自身への贖罪なのだから。

だがその時、百代に予想だにしない出来事が起こった。

「　　!?」

百代の頬に何かがあたり、勢いで身体が吹き飛びソファに叩きつけ

られる。百代は何が起きたのか分からず、目を見開いていた。

それは、大和達も同じである。全員が口を開け、あり得ない光景に動揺を隠せずにいた。

何故なら……ワン子が百代を、自分の拳で殴りつけていたのだから。

ワン子は身体をぶるぶると震わせながら視線を落とし、ゆっくりと口を開く。

「よく分かったわ。もう、お姉さまは……アタシの知ってるお姉さまはもう……いないんだって」

ワン子の涙がぼたぼたと床に垂れ、カーペットに染み込んでいく。そして、ワン子はいつもの元気な表情とは違った……怒りと悲しみに満ちた表情で百代を睨み付けた。

「今、アタシの前にいるのは……自分から逃げた、ただの腰抜けよ……」

本気で怒りを露わにするワン子の姿を見るのは、大和達にとって複雑だった。大和はワン子を宥めようと声をかけようとするが、ワン子には有無を言わせないオーラが漂っている。

「何が最強よ！何が武神よ！こんな……こんな腰抜けがアタシの目標だったなんて……ホント、どうかしてたわ」

自分から湧き上がる感情が、まるで溢れ出るようにワン子の口から吐き出されていく。もう、自分の怒りを鎮める事はできなかった。

「もう……アンタをお姉さまとは呼ばない！アンタみたいな腰抜けは……アタシが、アタシが倒してやるわ！」

ワン子はズカズカと倒れている百代に歩み寄り、胸ぐらを掴んで言い放つ。

「立ちなさいよ川神百代！アタシは……アンタに決闘を申し込む！」

決闘し、百代を倒す。できるはずがないと分かっているけど、今のワン子には関係なかった。ワン子の思考は怒りで支配されている。

散々ワン子に罵倒され、流石の百代も黙ってはいられない。百代は胸ぐらを掴んだワン子の手を払いのけ、ソファから立ち上がった。ワン子を睨みつける。

「……知った風な口を聞くな」

仲の良い姉妹に、亀裂が入った瞬間だった。互いに睨み合い、敵意をむき出しにしている百代とワン子を、止める術はない。

「表へ出る」

百代は顎で屋上を指し示す。誰にも予想できなかった、姉妹の対決が始まるうとしていた。

10話 百代の決意（前編）（後書き）

また長くなってしまったので、前編と後編にわけました。
次回もぜひぜひお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2097w/>

聖痕のクェイサー×真剣で私に恋しなさい！

2011年10月20日02時08分発行